

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十二年十二月二十五日 印刷
昭和四十三年一月一日発行 (毎月一日発行)
(第二十八号)

川柳塔



No. 28

川柳ゆーもあ特集

一月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、三三〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



疲労

神経痛は

すぐ

おとり下さい

活性ビタミン複合剤

ハイベスト

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

5 mg
25 mg
50 mg



高峰秀子

屠蘇の味ゆるんだネジをしめなおし

借金があるから年の瀬が楽し

人生の五合目あたり占稀の春

川柳塔自祝二句

大器晩成ですよと三年目が笑い

三つ目の角も無傷に陽を拝む

今月のことば

父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信
じ——どこかで聞いたことのある言葉位に思
う人も相当に居る。

明治生れの人は小学校に入ると早速、耳か
ら目から詰めこまれ暗誦させられた一連の言
葉であつて、国を挙げて平和を祈る悲願に外
ならぬ。人間生活には悲しい宿命として「対
立」という長い歴史の流れがある。対立とは
不安定である。個人では喧嘩国では戦争とな
る。その対立をなくし和をもたらしべくいろ
いろ賢者道学の方々が教訓を垂れ給うが更に

中島生々庵

その効なく、制裁のために法律が出来てもど
んどん破ってゆく。なにしろ選良の代議士諸
公が国会の場で長屋の夫婦喧嘩よろしく腕力
沙汰をやる今日の世相である。このあさまし
さをおなげきになりお釈迦様は、必ずや汝等
の国土にも安楽浄土を造ってやるぞ。暫らく
待てと仰せある。暫らくとはどの位と恐る恐
る伺いを立てると、五十六億七千万年と仰せ
られる。和とはそれ程難しいものらしい。然
し決して諦めてはならぬ。あくまでも以和為
貴である。

川柳塔一月号

川柳塔一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

新年吟と時事川柳……………清水白柳…(2)

新春を迎えて……………中島生々庵…(18)

川傍柳初篇研究……………(五十五)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清
川端柳風・故高須亜三味・丸
博美・藤井和雄
十府・岡田甫

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤梅志…(44)

近作柳樽……………川村好郎選…(34)

初步教室……………菊沢小松園…(50)

— ゆーもあ特集 —

ユーモアの句について……………北川春巢…(22)

私論・柳論

新年吟と

時事川柳

友達と別れた時がお元日 路郎
その昔本当によき時代の頃の句で
ある。或いは今でもこうした友達
を持てている人があるかも知れな
いが、こんな感じの句は到底出来
ないだろう。それが時世である。
新年吟を毎年欠かさず作句し続
けて何年になるだろうか。その変
り栄えもしない句を読み返して見
ると顔が赤くなるようなのが多い
併しその一句一句には、その時の
その年の背景がくつきりと浮んで
くる句ばかりである。
新年吟というものはそれでいい
のだ。句の良しあしを言っている
のではない。その時の、その年の
作者の感情が盛られて居ればそれ
でいいではないか。
昨年後半期になって、クロース
アップされた時事吟の問題にして
も、これと同じようなことが言え
るのではないかと思う。
時事川柳には前書をつけた句に
いい句がある。それは前書を生か
して作品が生れていくからだろう
古いことで恐縮だが、その例に、
大正十三年一月号の大正川柳に
荒涼の春 東京に半分鳴らぬ除
夜の鐘 剣花坊

阿茶・梅志・靈眼子・無聖・十九平・章雅・七面山・甲吉・恵二朗・摩天郎・日満・水客
 ・智水庵・多久志・快夢起・泉水・幽谷・一路・晃男・曉舟・柳葉・峯円・瓢太・素身郎
 ・鉄舟・千梢・不水・みのる・千翁・旭峰・布堂・一水・弘生・醉升・水車・魯木・柳志
 ・潮花・静観堂・きさ子・睦夫・湖平・蘭幸・法泉子・鶴汀・喜由・独仙・不醉・一声・
 好祐・丁路・一栄・操子・静歩・どんたく・静馬・久米雄・拳法・芳仙・弘朗・麴光・秋
 月・滋雀・八郎・明朗・杜的・喜仙・いわを・美房・代仕男・竹莊・静水・酔夢・文秋・
 あいき・白柳・奈良子・薫風・小松園・一三天(到着順)

川柳塔社同人名簿……………(48)

脇田勇氏を悼む……………橘高薫風……………(43)

大萬川柳「財布」……………清水白柳選……………(52)

★柳界展望……………(薫風)……………(54)

★本社十二月句会……………(庸佑)……………(56)

★各地柳壇……………(文秋)……………(59)

「年玉」……………藤原秋月選……………(46)

一路集「シームレス」……………谷沢好祐選……………(46)

「流行」……………奴田原紅雨選……………(47)

★編集後記……………(白柳・一三夫)……………(72)

関東大震災から半年も経たない頃の句である。

近衛内閣総辞職
 磨一步退き小手をかざしたり

路郎

というものもある。

最近の時事川柳は、朝夕刊の記事を前書にして作られているのでその記事が読み捨てられると、句も同時に古くなってしまうおそれが多分にある。それではいけないアルミニウムかアハハと我々

路郎

これは昭和十五年に一銭銅貨の代りに発行された一銭のアルミ貨を詠まれた兼題の軸吟だが、それまで迷っていた私はこの句によって開眼したと言ってもいい。物資の統制や、通貨輕視の世相に対する痛烈な批判であってこれが時事川柳の最たるものであると思ったからである。

ニッポンの政治あちらへ聞きに行き

これは昭和三十四年の柳志の作品だが、これなども立派な時事川柳だと思ふ。前書がなくともその時代を前書にした句は、われわれが現在、作品として発表しているのがそれでは昭和四十三年度の時事川柳と言えるのではないだろうか。

信号は青 元日も灯ってた

(清水白柳)



中島生々庵選

青森市 工藤 甲吉

食ってばかりここ掘れここ掘れとは吠えず

片っただけの下駄の如くに捨てられる

エスカレーターに熊ん蜂のような尻

だます涙は真珠とならず

かたくなの生まれは津軽十萬石

名古屋市 吉田 水車

痛いところ押えて痛いかと聞かれ

どうにでも思える紙の裏表

お経にもクライマックスありはあり

無口者しゃべれば陰にこもるなり

吉田さん富士に祖国をたしかめて

大阪市 正本 水客

葉げいとう大寺の跡と思わるる

木曾のうた木を切る斧の音がせず

館山寺(三句)

浜名湖も夜をたゆとう色になる

鶏のほか物音のない夜明け

工事船の波に宿かり生きていた

倉敷市 野田 素身郎

邪魔になる木だが秋には実をつける

俺にまで借せとはよほどの事ならん

半ドンになり国葬を批判せず

運動会気丈な妻のスラックス

退院を部下は歓迎しておらず

大阪市 後藤 梅志

七五三神主さんの刻み足

弟子というものに教わること多き

お濠の底には秋草が咲き乱れ
プライドのない若い人街を行く

年頭吟

お座付のように元日謠わされ

大阪市 不二田一三夫

遠い先きのとしび信じ歩ゆまんか
レターみな残してあると詰め寄られ
金わたす時だけ妻はハイと云う

寄席(二句)

前座ある日楽屋の隅で泣いていた

お浜・小浜

負われた日もあるに姉をやつつける

大阪市 市場没食子

伸びもせず縮みもせず年をとり

むかしむかしの女から電話

内風呂を沸かす時間も秋となり

大掃除消費時代のゴミを見せ

岸和田市 内藤きさ子

高う買う屑屋を待てば続く雨

ゆううつなことなりしかな途帰る

イメージをこわされてから好きになり

長いものに巻かれた一日やっと昏れ

歳月のうしろ姿へ除夜の鐘

石くれも三つ積んだら思惟の塔

別れては瑠璃光もはや無慚光

白毫寺境内華美な乳母車

豊中市 戸田古方

旅先の雨は主題をかえさせる

荒れ川の話をきくも旅のこと

看板をひとつずつ読む遠い町

上高地まできてトンカツ食べさせ

高槻市 若柳潮花

脇役に喰われ通した舞い扇

弟子に留守まかせ師匠の市場籠

ことはじめ名取りに早い春が来る

蛇の目傘むかしの色で出る新地

大阪市 山川阿茶

商売人泣かせた嫁の荷と知らず

金星へお嫁にゆくわとすねている

ぬく歯まだあったんかいなとうらやまれ

無駄もなく笑いもなかった日の反省

西宮市 若林草右

奇術師の鳩は小さく黙つけられ

票を買う値上げと知らず米稔り
エチケツト守れば人につき当り
原子炉もお払いをする神の国

倉敷市 本田恵二朗

人生譜低音ばかりとはさびし
森があるから神様に住みつかれ
会いに行く鞆に絵本の二三冊

娘の婚約

巡り会った良縁秋空澄み渡り

岡山県 浜田久米雄

八百屋での値段は聞かぬことにす
るに言いに来たかわかつていて話
し原稿紙そろそろ酔いがさめかか
り一人では行きとくもない初詣

高槻市 傍島静馬

落葉焚く煙に朝もやはれてくる
スマートにひよろひよろ咲いたマ
マの菊茶飲み友だち出来て外出
勝ちになり三毛よりはましやと老
母に留守をさせ

大阪市 大坂形水

柳友も真っ直ぐ帰る齡ばかり
嫁の荷で部屋が一層狭くなり

桐箆筒余りに無駄な親ごころ
牛乳が溜って年越す冷蔵庫

岡山市 服部十九平

返盆に紅一点が忙しい
長生きの壇徒を寺がマークする
辞退するパパを母子がはがゆが
り水すまし波紋を切っていい図
案

大阪市 本多柳志

敏腕は買われ金庫は任されず
黙々とノルマへ挑む靴が減り
初心まだ忘れておらぬ提げ鞆
法善寺水をかけてる京ことば

京都市 都倉求女

うちの子が寝たら静かな秋の街
市松の屋根へ明治のままの菊
カラーかと聞いて晴着写される
木枯しへ鯉も動かぬことに決め

京都市 松川杜的

山の辺の道にて

振り向けばこんな処に野の仏

正歴寺(二句)

孔雀明王の由来柿をむきながら

柿むいてくれて庵主さん話好き
後戻りして野仏の横で撮り

守口市 村田 瓢太

オートメで挙式一年目で別れ

信州・木曾路の旅(三句)

義仲も藤村も見ただろ山仰ぐ

観光の目にありがたくなし善光寺

紅葉の中の白樺よく目立ち

京都府 大鶴 喜由

病むことは餓死につながる野の雀

父と母一間離れ戻って来

老の足罪ほろぼしの朝詣

味噌汁の味から姑こじれかけ

出雲市 尼 緑之助

明治百年身じかなところふりかえり

還暦を祝われて

瞬間の目と目で握手をしたつもり

還暦々と老いを刻まれる

一男結婚

荒波に呼吸の長いゴールイン

諫早市 川岡 靈眼子

層蘇にだに禁酒は硬し自家用車

人間に初日見慣れた顔を出し

元旦の豆煮つめつつ白髪染め
科学には勝てんと月は信じきり

神戸市 仲 どんたく

ぶぶづけの夜食でわんたん屋夫婦

牡丹灯籠の如く夜毎をネオン街

囁託となつて定年趣味に逃げ

北九州市行

観光バスあなたまかせの秋が晴れ

香川県 三井 酔夢

ひとりだと見たか子ねずみ愚弄する

行楽の秋にひとりかふと淋し

アベックの肩越しに見た菊花展

しのびよる老か盆栽など見てる

大阪市 西 出一栄

クローバの四つ葉求めし過去のあり

冬近く仙人めいたすすきの穂

鍵っ子の視線を追えば白い月

かるた取りだけは明治も狩り出され

熊本県 有働 芳仙

倦怠期髪型を先ず変え給え

素朴さは女中に生れ来し如し

貫禄がなかった頃のパパが好き

決心をせまる乳首の色変り

大阪市 金井文秋

へんちゃらやないなとだめを押す阿呆

ノイローゼまた新薬に負けている

愚痴ばかり言うてて総会では無口

貰うよりよけいに返えす見栄を持ち

東大阪市 久米奈良子

鍵しめて女世帯の夜となり

山科勸修寺を訪う

なだらかな山ふところを幸と見し

高壁のつづく白さへ松の影

ネオン明滅告白のプロフィール

大阪市 中川滋雀

目覚しに明日を頼むネジを捲く

医者云うとおりにこじれた風邪になり

開けにくい戸を押売りが軽う開け

こうすれば切れる鉄にたとえられ

岡山県 浜野奇童

玄関で菊一輪が待つ社宅

日当りの山から順に秋が来る

歳の市老母オロオロひきずられ

当然のようにお歳暮受け取られ

倉敷市 水粉千翁

砂と波ささやく過去へ目をつむる

お似合いになって老けてる父と母

弓削にて

親に似よ似るなと語る碑のまぶし

しみりとどうでもなれという未練

大阪市 福井多蘭子

野の花が畳にこぼれる午後であるよ

われを待つように硯の乾いてい

振袖がミニになつてゐる絵画でみる

故吉田茂先生国葬

国葬へ半旗の数をかぞえて見

竹原市 小島蘭幸

丸刈りの過去は聞かないことにする

強引にくつつかされて撮ってくれ

キスしてと言われて出来るものでなし

恋をする暇がないよと逃げておき

島根県 藤井明朗

紅葉をうつしてダムも秋の音

別れの手離せば会えぬひとと知る

値上りへもうへそくりもままならず

雨降りの祭りゆっくり飲むによし

平田市 久家代仕男

釣り捨てた小ものくわえて磯のかに

挟み竹届かぬ柿へのぼる月

出稼ぎに都市へ流れてそれつきり
大役が済んで案山子も横になり

富田林市 川端東雲楼

上に上あっても俺に下がない

きょうという日はもうこない落葉焚く

メーターカチリタイミングよい停車

柳友松本吉太郎君のドック入

ありあまる力ベッドで持てあまし

新居浜市 安藤桂仙

ふと空気ぬけているなと思う年

年金でくらのげのように生きており

孫だいた膝のぬくみや秋深し

鬼瓦ビルの高さが気に喰わず

大阪市 水谷竹莊

同じところでまた叱られる舞扇

足袋と裾気にして和服かしこまり

板前の腕を信じてふぐ料理

十二月だけは独身うらやまれ

高槻市 山田季賛

残業の帰り満月賞めて見る

茶の味がぼつぼつわかる年となり

僕を君(くん)よびにする女事務

苦情聞く係で苦情言いいそこね

一杯のバケツの水に掌を合せ

秋冷の候へうっかり風邪を引き

別れちゃったのよと女が語る半世紀

岡山県 直原七面山

泊る気にさせた男の口説きよう

焦点の合わない恋に疲れ果て

蛇のように搦む女の甘い声

鳥取市 河村日満

女の幸せとはと夫婦で娘を口説く

出張中にA氏逝く

舞台なら引き戻さんにわらじ履き

米値上げ寄附まで一級酒にさされ

下関市 桜川不水

叙勲を祝して

菊花芬芬大杯に揺れる白い髪

数の子なんてこんなもんじゃと総入歯

満腹になってみの虫ぶらさがり

今治市 越智一水

名刑事無駄を重ねて無駄にせず

デパートにはいれとさそう春の風

反八俵などと作らぬ人がほめ

愛媛県 渡辺 曉 童

虎視たんたと落選を待ち

つもるうらみを晴らす一票

コーヒーにしたのが厄のミステーク

室戸市 奴田 原 紅 雨

子の物を買う貧しさも楽しいぞ

秋はよいもの毛糸編む妻と

妹の家で飲む日の酒を買い

藤井寺市 西 い わ を

寒空に水仙挑んでいる如し

手に載せた名刺ずしっと重かりし

還暦のまぜ寿し矢張り母の手で

下関市 中村 九 呂 平

何も苦がないか師走を懐手

重宝も邪魔にもされている明治

ニンニクを食べて一日とし込もり

防府市 弘 津 柳 慶

先生の笛で園児の手が揃い

御祭りが近く店舗を改造し

身の廻りに追われて浮気どこでなし

倉敷市 木村 長 三 郎

閑日月鉛筆一本で用たりる

乃公の出番へ妻の差出口

紅鳥曰のべにをうつして水澄める

倉吉市 奥 谷 弘 朗

嬉しさは婿父さんと呼んでくれ

やせ我慢しているうちにくる寿命

政治的配慮とやらで値上され

岡山市 江 国 幽 谷

如露の水頼りに松は鉢で生き

公平を期せばオモチャも三ツいり

何一ツ云うこともなく胃をなやみ

岡山県 大森 娛 句 楽

噫吉田宰相によせて

大磯の波も鎮まる鐘が鳴り

農繁期骨休みさす雨が降り

湯疲れの腫を見張らせるいい紅葉

岡山県 田 村 藤 波

恐わいもの一つに全学連が増え

一人子を呑んだ彼方に陽が沈む

大漁の日は仇討をした心地

大阪市 今 西 章 雅

呉服屋に妻の和裁の腕買われ

区民体育応援だけの朝を起き

盲目抄へ

盲目抄不死身の脳がペンに冴え

大覚寺千百五十年大法要

芦屋市 丸川初甫

古図の位置古図の姿で塔が建ち

飛び石のしめりみの虫尻を上げ

退職三年ペンだこの跡もなく

大阪市 福井野迷路

要不要みんな忘れて心泰し

毛語録食わず嫌いだっらし

嘆声

半時も目つむつとれず亜鈍尊とし

宝塚市 小島無聖

庭下駄へ秋風ぬける足の裏

電化なき貧しき炬燵なつかしく

甥の結婚

さざめきが満ちて花嫁華麗に出

笠岡市 木山遠二

お古着て案山子亡き子に何処か似る

ひとりでに咲いて黄菊の美しく

日日好日出過ぎないよう心がけ

竹原市 山内静水

天高しあくびとがめる人もなし

ライバルにうす気味悪いお辞儀され

三界に家なし貴男の趣味に添い

八起する父へ一家の歩が揃い

乾パンがこんなに美味い水害地

大阪刑務所金八会満一周年を祝して

川柳の種火育ててよい集い

枚方市 宮川珠笑

笑わねば涙出そうな酒を酌み

つるはしは何ができるか知らず掘り

税務署がピアノの音を聞いて去に

普通寺市 岡田拳法

穴当てて来たのか無口はずんでる

読みにくい草書で依頼状が来る

療養三年母を邪教に取られたり

岡山県 藤原秋月

求人難巽も仕掛けて待っていた

もたれば相手も凭れて来る心

百舌の餌がひからびて来て冬の彩

守口市 羽原静歩

定年へひっそりかんと年が明け

石仏へつるべ落しの陽がわびし

紫煙もうもう値上げの顔でなし

松江市 柳楽鶴丸

小数点以下似たもの夫婦です

底辺のくらしの中に流行歌

おめでとう一番乗りの飲み仲間

ホノルル 加川カロ女

間のわるさ妻の気転に助けられ

母性愛猿の母子に教えられ

笑顔みて不吉な予感カラリ晴れ

大阪市 天正千梢

早朝伏見稲荷参拜

柏手は三十六峯明けぬ間に

火花散る勝利へむなしさだけ残り

銭かねで買えない物を持ち合わせ

大阪市 室谷鉄舟

どちらとも解らないから白を編む

短気者もう一押しを押しきれず

居眠りはそっとしてやれ定時制

八代市 永松道雄

雨乞いへまたたく星のそっぽ向き

教育の真価大学ストの庭

薬石のきき目この世へあと戻り

八代市 満田銀風

風邪などに敗けてはおれぬ子沢山

食欲の秋をおびえる子沢山

高崎山にて

ボス猿の一段高き岩の上

東大阪市 本多清人

わかりきったネタでも漫才おもしろし

子の意見入れて片道バスにする

ポストにも傘着せかけて出す手紙

泉佐野市 大工陸夫

俺に似て刈田の案山子も淋しそう

そよ風に稲穂が雀の頬撫でる

味気なき日々も女房の待つ笑顔

大阪市 宮地双楽

スモッグの朝肌寒むし一万歩

千羽鶴平和の使い原爆塔

賃上げに先ず雑役がのろしあげ

奈良市 村上春巳

七五三うちの長屋もひと騒ぎ

8ミリへ柿がきれいな白毫寺

浄瑠璃寺柿を頬張る人と会い

岡山県 横山一声

自慢したい菊をだれも見て呉れず

十二月胸算用をして使い

文化の日に産めと無理なことを言い

大阪市 児島与呂志

高速駅にて

螢光灯さむざむ白し切符切る

毛深いを意識しているシームレス
結婚と云う字に弱いお年頃

大阪市 宮尾 あいき

東京土産フウテン族の話も出
忠実に鳴って目覚し嫌われる
歯を入れよ白髪染めよと娘の指図

美禰市 安平次 弘道

天草にて
殉教地静かさ破る橋が出来

阿蘇にて(二句)

草千里貸馬の背に霧流る
霧の阿蘇ガイドも気の毒そうにわび

鳥取県 清水 一保

家計簿の許す範囲で甘えとき
亡き母の言葉を借りて子をなだめ
金と地位できて時局を口にする

兵庫県 遠山 可住

芸の無い者は支度に行らされ
言うたんね言うたんねと女の子がおこり
ちようどよいところに母がいて使

松江市 小林 孤呂 二

ここらあたりローギアにして四十
公害は人ごとにきき秋すめり

横断橋つつがなき子の声迎え

松江市 中川 晃男

朝刊へ味噌汁の湯気さめかかり
泣いたとて笑ろてみたとて一人ぼち
本人にとっては笑ろてすまされず

堺市 高崎 雄声

百才を目指して進む老いの坂
豪華だが喜ばれざる贈りもの
事故あってから謹慎のアゴ紐か

大阪市 河井 庸佑

肩書きが有るから聞いてくれるだけ
見る人が見れば不思議でない手品
退職をして本当の値打ち知る

西宮市 野呂 鵜汀

家裁出て妻と夫は右左
父の死へ秀才の児は泣かなんだ
菊の香よ今幸せの中に居る

笠岡市 松本 忠三

一円の差が行列の年賀状
事務服の型がどうのと女事務
青春を養老院で知り始め

兵庫県 大江 秋月

だんだんと亡夫に似てくる髪のかさ

一ツでも若く見せたい参観日

香水の匂い氣にして旅歸る

伊丹市 小川 静観堂

日本は ECONOMIC ANIMAL に生長し

ホームとカーそれはええけどババが有り

霊柩車のムチウチ症をまだ聞かず

鳥取市 森 本法 泉水

十一月三日菊本当の色に咲き

どうまちがったか大阪のマッチもち

予防注射それより先に風邪をひき

熊本市 楠 田 英子

金もっているからまたぬふりも出来

底ぬけの明かるさ未亡人として二十年

霧深く夜店をたたむ人の咳

奈良市 宮 口 笛 生

陽の沈む果てを子供が問いつめる

大阪は食べるにおいのするところ

月の出に地球の動くのを覚え

加賀市 木 村 一 路

闘病一年影絵の如く四季過ぎぬ

砂山の吾を一人にして静か

青春に悔多かりき文を燃す

奈良県 草 深 醉 升

運鈍根停年後とて変りなく

老妻の意見をいれて無事にすみ

もうそこに冬が来ている長い影

宝塚市 中村 ゆきを

目の肥えた方が弟子とは知らなんだ

相手でもないのに義憤にからまれる

採めてるのに阿呆が酒を出し

大阪市 碑 弓 彦

どうしても燃えてならない人に燃え

傷薬日曜大工の箱の中

雑役の細い女の腕硬し

高石市 谷 沢 好 祐

ミニ・ロングともかく脚が短か過ぎ

飲めばタカふだんはハトが僕に住む

交通停滞家康でゆく他は無し

宇部市 平 田 実 男

下駄一つおろすに明治は曆を見

焼芋を吹く娘恋心忘れてる

見せかけのまごころだった詐欺に会い

ハワイ 羽 佐 間 柳 葉

方言も入れて司会者和ませる

奥の手の詭弁も利かぬ晦日

借智恵が違ふ話題にうろたえる

愛媛県 村上旭童

不倫ではないがチヨイチヨイ好きな人

何も言わぬ約束でのむコップ酒

金で済む話へ金のない男

泉大津市 高津徹也

結論に至る経過に異議があり

マリア様の微笑にも似て児を抱く

一旦は見逃しておく手を使い

富田林市 岩田美代

眉につばつけて好意思案する

鏡みな秋をうつして髪を刈る

目くばせが其の瞬間をとりになし

鳥取県 森田布堂

喫いつけるたびに一本くれという

いくら寄附したかと隣り聞きに来る

催促は出来ず十円貸したまま

鳥取市 藤本礎山

まわらない舌が可愛い口答え

帰省娘を野良の目が追う屋さがり

偶然の道づれ何故か気にかかり

笠岡市 木山要次

ポケットに百円札がある自信

プライドが僕にもあった腹が立ち
奥の声聞いてしまった応接間

笠岡市 出原真奇

暑かった夏も終った雨の音

ため池の地割れへ雑魚の干からびて

目も耳もおまけに口までまだ達者

和歌山市 二越俊爾

日雇いの大工刃物を研ぐ仕事

新聞を拡げてるだけ待ちぼうけ

壁際へ座をしめたがる齢となり

和歌山市 西尾公作

暗算で勘定合つて銭足らず

遠慮のない酒で車を置いて去に

つけまつ毛はずしホステス顔を剃り

和歌山市 土谷城石

青筋を出るだけ出して注射針

社長婦人素人ばなれの化粧ぶり

癪たてて犬と互角に渡り合い

大阪市 川口弥生

友人中川政夫君の急死

なんで死んだこんな言葉が口に出た

信貴も亦晴れ切らずして菊の葬

祖母伯父の七十回、父の二十三回忌
とうさんは法事の好きな人だった

大山寺にて

米子市 石坂新雪

鐘の音もみじを散らす風となる

顔そりのクリームで動くのも入歯

俺の歳から数えてる妻の歳

熊本市 岡本昭三

しぶちんが一番先に出す会費

酒飲みの番付けも聞く慰安会

ネクタイのむすび三度目も曲がり

桜井市 岩本雀踊子

思いきや男の子まで妻につき

三代の御代をくぐって来た頑固

青春の野望地球儀がまるい

堺市 高橋千万子

パーティの座にライバルを意識する

陳情をいと丁寧に追いかえし

直角に持ってもいつか墨ゆがみ

呉市 林野甍光

合理化ヘデスク一つが横を向き

豊作の稲がうれしいお辞儀する

兵庫県 河原みのる

孫貸すのかさぬなどと悩み増え

巡回癌検診

遠からず死ぬのんやけど癌はいや

新聞をよむひざ猫のためにあげ

おふくろの手紙私しかよめず

姫路市 隠岐不酔

ノックして這入れば社長漫画読み

おくれ毛をかき上げ世帯やつれ見せ

福岡県 太田湖平

古井戸へ汲む水があり陽を拝む

断水へ地獄の水へボーリング

松江市 岡崎祥月

久方に苦勞忘れた老夫婦

人の和を説き人の和のむずかしさ

岸和田市 上林加仙

雑役の小さい夢の宝くじ

支持の悪い得意の急ぐ用

大阪市 西川誓二

菩提寺本堂にて

本堂の障子に落葉の影が舞い

盲人の書物に目明き眼を睜り

大阪府 森本良夫

胃潰瘍手術後

友の身を安するほどに予裕もち

銭湯の湯舟へ傷をおさえつつ

奈良県 西辻竹青

沖繩問題ヒモで大山引くごとし

見ておれと言うたあげくがこの始末

岡山県 池田古心

信心の同行二人足達者

信心で恋を拾って来た話

和泉市 西岡洛醉

手をひいて母のぬくもり知った今日

参道の老若男女僕も其一人

京都府 清水谷句楽坊

まやかしの世をまやかして生きつつけ

あれ寺で野仏のような日を送る

倉敷市 井上旭峯

先輩の矛盾へ合槌打っただけ

団交の中に小さく女秘書

小松市 馬場魚山

乳のあたりまで白うして夜を生き

三回忌心の隅にある空虚

加賀市 細呂木魯木

ハネムーン空もやいてる暗い雲

雑草を教訓にした師の老い給い

堺市 青野遊仙

おぼはんに蒸発するとおどかされ
おっさん長生きしやと川柳ひやかされ

★

清水白柳

明治百年錦の御旗くり返す

時計の振り子がイメージの邪魔をする

波がなければ広い海原

大胆を笑うてすます未亡人

川村好郎

笑われる帯を老妻持ちたがり

値切ってる妻を離れたとこで待ち

布はしを噛んだチャックに似た会社

秋空よ私をゆるしてくれており

水掛けまい寒がりだったナー梅里

西尾葉

齢六十三猿主義に徹せんか

ペースという駆引にまきこまれ

乗り降りが一番あとにするよわい

落葉踏むデートはカメラもっていず

掛け替える軸へ紅白歌合戦

北川春巢

珍客を琵琶湖満水して迎え

遠来賞乾盃の音頭とらしとき

会費にはふれず命の洗濯や

大臣を呼び捨てるのもいて楽し

カメラ持ったのが真っ先きにバスを降り

若本多久志

ご気嫌になって帰れば妻の顔

経営を手相観ごときに訊いてみる

栓抜きを帯にはさんだ職に生き

皆様のデパート財布すられて来
末っ子が俺の老後をみると言い

菊沢小松園

僕が居て君が居て星が流れる

息子との距離を縮める話題にし

ただ一人を思ってからの人嫌い

立退いた順に道幅広うなり

シルエット見ている方が眼を伏せる

新春を迎えて

中島生々庵

明けましてお芽出とうございます

お蔭さまで「川柳塔」社も、三度目の新年を迎えました。その新年は申歳であります。申歳といえは、誰しもすぐ豊臣秀吉を思いだします。秀吉の母が、月輪体内に入ると夢みて懐胎し、天文六年申歳の正月元日、初日の出と共に生れたといういつたえを、素直に私は信じておきます。それは丁度徳川家康が天文十一年寅歳の十二

月二十六日寅の刻に薬師如来の申し子として生れたものと伝えられるのと同様で、こういう話は伝説という神秘的なベールに包まれたまま薄ぼんやりしておくのがいいと思います。余り専門の学者さん達が掘りかえして、やれ木下弥右衛門という藤吉郎の父親は借りものの親で、ほんとうはてなし子の私生児だとか、或は尊いお方の御落胤だとか—そんなことは私にとっては大してかわりのない話であります。申歳の元旦、初日の出の刻に生れた、それでいい

のです。その関白秀吉殿も四百三十年後の申歲に「川柳塔」が大阪のどまん中、島の内で第三番目の新年を迎えるなんて、まさか夢にもご存じなかったらうと思います。

三つ児の魂百までとは昔から言われているところではありますが、三歳児の「川柳塔」の魂はどんなものでしょう。仮りに秀吉のような英智とど根性があったとしても、日吉丸や藤吉郎といった時代の骨を刻む棘の道は当然通らねばならぬ宿命の道であります。まして私は秀吉のように目から鼻に抜けるような才能的な世渡りは嫌いであります。何から何までソツのない、電子計算機で編み出す百パーセント生活や、一年の計は元旦にあり等としやちこ張った生き方は私の性に合い兼ねるのです。麻生霞乃夫人の

門松は無用常住座臥の門

とゆきたいものです。

昨年の年頭ご挨拶にも申上げました通り、身分相応、脊伸びをしない夢を少し宛つみ重ねながら、大地をしっかりとふんまえての日暮らしを祈念するだけなのです。

世間ではよく新年の挨拶の言葉の中に、今年こそはいよいよ曲り角に來たといわれるのを聞きます。どんな曲り角だか私のような者には知るよしもない事ながら、たとえどんな方向へ地球が回転を変えようとも、決してあわてする等のことのないように、私は私なりに抱いている夢の糸だけは切らしてならぬと思っております。

この頃のように矢つぎばやに水爆とか、人工衛星とかが打ち上げられて参りますと、人間生活の福祉と人類絶滅の魔物とが紙一重に隣り合っている感じがします。そんな歳のお正月であればある程しっかりと落ちついたお雑煮の餅を味わわなくてはならないとも思うのです。

「めでたさも中位なりおらが春」。この有名な句について、俳人

楠本憲吉さんが或る紙上でこんなふうに書いておられます——この句ほど因業おやじ一茶の本心のむき出しにされた句はないといつてよいだらう。「中位」という表現に、実にこずるい自己満足感が充たされていて、まことに嫌味千万の句であるのだが、嫌味もこれほどないので、好き嫌いは別としてやはり名句のたぐいといふべきなのだらう。芥川竜之介の「元日の手を洗いをる夕ごろ」も評判のいい句だけど、文人俳句のそれはどうも隔靴搔痒の感が残って百パーセント享受出来ないのはなぜだらうか。散文作家と俳人の感受性の根本的な相違といったものを考えさせる要素を、この句は含んでいるように思えてならない——と評しております。私は無条件にこの評を支持したい一人であります。

そこになると今更のように思い浮ぶのは、路郎先生の

凡聖一如元旦のころ知る

という天下第一品の名句であり、そして間髪もいれないように

元旦だせて眼鏡を拭きませう

の句が私の頭に迫って來ます。川柳人としての先生の感受性が如何にひしひしと強い力を持っているかを知らされるのであります。

寝不足の頭に居蘇の味がほんのりして來た頃、この先生ご夫妻の句をならべて心の中で読みかえりしておりますと、お正月とはこんなものだなあと結論みたいなのをつかめます。美しい花は、温い土壌から育ってゆくように、いのちある句は豊かなそして健康な夢の中から生れて來るのです。考えてみますと「川柳塔」が現在歩いている方向と、持ちつづけている夢とは、かけがえのない、ほんとうに大切な一筋道であるように思われてなりません。

みんな一人一人、心して前向きに精進して行きましょう。

川傍柳 初篇研究

(五十五)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 故高須唾三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

460 なんだ玉をつらぬき小袖をもらひ

一甫

藤井||不解とするのもしくはくなので直感でいくと文屋朝康の歌「白露に風の吹きし

く秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」は後撰集に、「延喜の御時歌めしければ」とあるから、この名歌を奉って御感を得て延喜の帝醍醐天皇から小袖を賜ったというのではあるまいか。それをなんだ「つらぬき玉」で小袖をせしめやがってという陸口か。小袖拝領の事実あれかしと念じているが御教示を待つ。

川端||不明。つらぬきは糸を通すこと。

玉は色々な意味があるが、ここでは玉のような赤ん坊を意味しているのではなからうか。また玉にはヨニの意もあるので①玉のような男子を産んで(もちろん妾)出世した②なんだ妾の身分での二義に解される。

なお朝康は康秀の子であり、延喜の頃の人というだけで、小袖を買った事実も説話もない。「玉をつらぬき」は「つらぬきとめぬ」と逆の意だが文句取りと思う。

高須||「涙玉を貫き」は勸進帳の文句取りと飯島花月翁はいつている。そんな故事でなく、「泣く泣くもよい方を取る形見分け」だと、柳・三両先生に言っている。僕もそう思いたい。

前田||「帷ん見れば大恩教主の秋の月は洋治眼に荒く、涙玉を貫く」と謡曲「安宅」の詞句の一節がある。句意は親の死後の形見分けである。小袖は絹布の縮入のこと。涙玉を貫き後家寺参り

傍三・4 丸||形見分けである。勸進帳の文句取り

岡田||同。「なんだ」は涙の撥音便。古文によく出て来ます。「涙数行」も「ナンド、スコウ……」と読まないと口調があ

まい、口誦するために自然にそうなったのでしょう。

461 後チの紅葉もじゃくばると車切り

同

藤井||播州姫路の城主神原式部大輔政岑は吉原三浦屋の十代目高尾に馴染み白昼行列を整えて廊に入り遂にこれを落籍して下谷池の端屋敷に置いた。幕府これをせめ隠居を仰せつけ、子の政求を越後高田へ転封した。(時代川柳大観)

ばつとした金三浦屋へ二度はひり

七・14

聞き怖ちて二度目の高尾すなほなり

二二・7

運のい、高尾は車留に成り

一七・23

仕合せは車むごいは秤なり
「じゃくばる」は頑張る、我意を通すの

意。榊原侯の寵愛をうけた十代目高尾も我意を通すと先代の高尾のように三股で舟切りになる所を、素直に落籍されたので玉の輿に乗り、舟切りならぬ車切りにならなかったと、両高尾の幸・不幸を比較した句。源氏車は榊原家の紋で、車切りを暗示している。

車では浮び舟では沈むなり 五九・37

高須 書物によると仙台高尾は妄説だが榊原高尾は実説で、後者が前者の伝説を造りあげたという説がある。とするとこの句など虚説・実説とりまぜた迷句というべきであろう。

丸・岡田 同。

462 ト笑ひわらって顔の袖をとり 龜遊

藤井 箸が落ちてても笑う年頃の娘が、一盛り笑ひこけてやと顔をかくした両袖をとった所で説明の要もない。昔も今も変らぬ娘の笑ひをよく描写している。

川端 贊。さらりとした佳句。

高須 「ひと笑ひ笑って」という表現が面白い。こういう何気ない句が川柳として世に広まるのを望む。

前田 贊。この笑顔は美しい。

丸 半元服のかね付けの句と解している

岡田 丸先生の御説の通り。

463 銭ありの市立大門へ這入

一甫

藤井 市は歳の市の略称。江戸では十二月十四日・十五日の深川八幡社内、十七日・十八日浅草観世音市、廿日・廿一日の神田明神市、廿二日・廿三日の芝明神市、廿四日の芝愛宕下山市、廿五日・廿六日の平河天神市等あったが、単に市という川柳では浅草を指す。一方には吉原という楽天地を控えていたためである。

市になきものを息子に買ひに行き

安七楼 3

かこつけの仕舞が市と息子行き一・5の句の如く今日は銭があるから市の買物だけでは済まないのも道理、縁起物をかついで仲へと心がいさむ。従って当日は吉原もさぞ繁昌したことだろう。

川端 大門とあるから吉原へ遊びに行ったもので、十二月十七日・十八日の浅草の歳の市は、吉原では大切な書き入れ日であった。

高須 市の市立（いちぢち）という言葉にこだわる。市が立って銭があるでは銭ありの市立が妙な表現になる。句面から素直にうけとれるものは市に立って商いをした男が

だいぶ儲かったので、吉原へ入ったということになるのだから得ぬことか？
岡崎 「銭無しの市立」という俚諺がある。銭も持たないで市に行き品物をひやかしてまわる、買ひたくても買えるはずがないこと、身のほどを知らぬたとえにもいう。この俚諺をもじって、今夜はふところ暖かく、年の市から吉原に繰り込んだというのだろう。

丸 岡崎説賛。

岡田 同。なお「市立」「市に立つ」は市に出かけることをいうのです。

松坂屋友の会 カトレヤクラブ ★会員募集★

お買物資金の積立におたのしみ
がプラス、満期までの12カ月
間にいろいろのたのしい企画を
お贈りします

会費 1カ月1口1000円

観劇・行楽・映画など年3回の大行幸に
ご招待のほか各種講習会などの月例行事
にご参加いただけます

お申込は6階友の会受付へ

●ご入会時に記念品進呈 ●友の会サロンのご利用 ●お買物案内状および月刊誌「かとれや」毎月発送

月曜定休



大坂天満橋
松坂屋
電 942-2201

第3回

ゆーもあ特集

ユーモアの句について

意味論の立場から

北川春巢

「何だ、こんなに沢山穴があいている。不思議なもんだ。」

「馬鹿、それは蓮根というもんだよ。」
「よし蓮根にしてもサ」

この小咄を二、三度繰返し読んでみると、自然と笑いがこみ上げてくるであろう。これは三十数年前、私が川柳をはじめた頃に読んだ故水府氏の「川柳手習」で読んだもので、今も忘れることができない。ユーモアの見本である。

「ユーモア特集」に三年も続けて書く、またか、と思われる読者もあることと思うが川柳の「ユーモア」にはいくら書いても尽きることのない味があるものである。

昨年の「ユーモア特集」に、私は「意味論入門」という本を読んで紹介し、「意味論」には「コンニャク問答」と「テレスコ問答」があるということを書いたつもりである。

「コンニャク問答」とはコンニャク屋の六兵衛さんが活躍する「コンニャク問答」という落語から名付けられたもので、私はこれを略述して、コトバ（記号）は同じでも、受取

る人によって現わすものが違うために起こる間違いの中にユーモアがあることを書いた。

昨年の「ユーモア特集」の句の中から、一二の例を挙げてみよう。

ラッシュアワーわたしのお乳房何処へいた

（阿茶）

「お乳房」は「おちち」と読むのであろうが「おちち」というひとつのことばで、本物の「おちち」とパットと称する「おちち」といったものを現わしているためのユーモアだ。亡姉さんの形見兄さんごと貰い（狂二）「形見」ということばが、品物だけでなく、「兄さん」という人間までも貰ったことを現わしているために起こったユーモアである。

ブドー酒も駄目かと医者にくい下り

（酔夢）

医者は「酒」を飲むなと云った。そのサケということばの中には、日本酒もビールもブドー酒もウイスキーも焼酎も泡盛も、あらゆるアルコール類を含めているのだ。患者の方はそうは取らず、サケが駄目なら「ブドー酒」はどうか、と尋ねたというのである。こんな

情景は毎日のように診療場で出会うユーモアである。

この「コンニャク問答」とは逆に、色々の違う記号（ことば）で、同じ物を指すのが、「テレスコ問答」である。ここにもユーモアが生じる。

昨年は紙数の関係で書かなかったが、その落語を略述しよう。

昔、あるところで不思議な魚がとれた。みんなで寄ってたかって見たが、誰も見たことも聞いたこともない。それでお奉行様が揭示を出して、この魚の名前を知ってる者は名乗り出よ、百両やる、と云った。イチベエさんという人があらわれて、これはテレスコという魚です、と云った。ところがお奉行もさるもの、もう一度ためしてやれというので、今度はその魚を干し乾かして、ひからびたのをまた立札を立てて、不思議な魚の名前を知っている者に百両やる、と云った。すると、またイチベエさんがあらわれて、これはステレシキョーです、と云った。お奉行様は、百両くれるどころか、これはお前がテレスコと称

した同じ魚であるぞ、お上をあざむくふとどき者、というわけで、打ち首になることになった。そして、おかみさんが子どもを連れて会いに来た。何か云い残すことはないか、と云われて、イチベエさん、ヘエあります。くれぐれもイカの干したのをスルメと云わないように、子どもによく云い聞かせてくれ、と云うと、お奉行も感心して、許してくれた、という落語である。

そこで、ひとつの物を、いくつかの違った名前であらわすこと、いくつかの記号が、ひとつの事物をあらわすことを、「テレスコ問答」というのである。

喫茶店で紅茶を注文すると、女の子の給仕は「デイーですね」と念を押す。トンカツにメシをくれというと、ライスですね、と云う。いずれもテレスコであって、川柳にもなりそうだとも思われる。

昨年の「ゆーもあ特集」の第一句

試作品として長男に生れ

(好郎)

作者の説明がついているが、「試作品」も、「長男」も、実は作者本人を指している。そこにユーモアがあり、「テレスコ問答」のかみすユーモアだと思ふ。

しかし、「テレスコ問答」の方は、少々理屈っぽくなるためか、川柳にはあまり向かないのか、ちよつと探したのだが、例句は余り見当らなかった。そこへゆくと、コンニャクの方は断然多かったように思ふ。

はじめに書いた小咄に戻ろう。穴のあいた

ものは沢山ある。色々と知っている。その中のひとつに「蓮根」があるのだ。「よし、蓮根にしてもサ」というのは、やはり「コンニャク問答」であろう。

また意味論では、場面とはなれては意味がないといわれる。お茶席へ出ようと仕度をしてる人が「紙」をくれといえ「懐紙」のことであり、電話をかけている人が「紙」をくれといえ「メモ用紙」である。また環境とか以前の経験が違えば、同じことばで違うものを考えもしようし、違うことばで同じものを指すことも、当然あるだろう。日本人がイヌというのを、アメリカ人がドッグと呼ぶのは後者の例であって、これは「テレスコ」である。

アベックが来てアベックが去るベンチ

(一水)

(四十一年新年号、ゆーもあ特集) 同じ「アベック」ということばで、違う「アベック」を指している。そこがこの句のユーモラスな所であろう。

同じ新年号の「川柳塔欄」に

見舞客毒な話もして帰る

(きさ子)

という句がある。「毒な話」といえば、「見舞客」という場面から、ある人は酒の話と思うかも知れぬし、ある人は食物の話、ある人は女の話、と思うかも知れない。読者の環境や今までの経験によって、同じ「毒な話」の受取り方が違うのである。コンニャクである。そしてそこにこの句のユーモアもある。

同じ号に

見直したと褒めたつもりでいうたのに

(古方)

という句がある。これは「コンニャク」ズバリである。何を云ったのか句には現れていないが、云った人は褒めたつもりだったのが、聞いた人はくさされた、ととったというのである。

「ユーモア」がどうも理屈っぽくなってしまった。川柳の「ユーモア」にはまだ他の要素もあるが、また他の機会に譲る。

参考書片桐ユズル「意味論入門」思潮社

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス



積水化学

本社 大阪市北区堂島町1



大阪市 山 川 阿 茶

英語しかわからぬ犬を貰いうけ

上海で外人が厳格に訓練して飼っていた犬でお行儀がとてもよい。毎日牛肉を食べ車で運動につれて行く、私も犬になりたい。

大阪市 後 藤 梅 志

叩き売からも甲斐性無しにされ

叩き売から簡単に甲斐性なしにされた。ところは昭和廿七年千日前。買わぬ客は苦笑して去る。そう云われると、そんな気もした。

諫早市 川 岡 靈 眼 子

口開けたままにのみ込む赤ポスト

人間には至難な芸当、羊の食うものを食ろうて来たポスト、腹一杯は日頃のこと、胸一杯は年の瀬風景（擬人法で参上）

兵庫県 小 畠 無 聖

たしなみを知ってる足の斜めなり

顔は舞台化粧のような厚化粧、くま取りの目、そのくせ足は、ふくらはぎのスリッパまで見せ、あられない格好にはうんざり。

岡山市 服 部 十 九 平

先生がニッケネームの型で来る

容貌や性格などを諷したのではなく、歩く格好から、つけた仇名である。その仇名通りの格好でやってくる先生、微笑。

大阪市 今 西 章 雅

フィルターへ肺癌預けたように喫い

A「よく吸うネ」B「肺癌が恐くてフィルター付きだ」C「両切煙草も吸殻部分はフィルターだ」専売公社「誰だ、営業妨害は困るネ」

岡山県 直 原 七 面 山

世話好きの女房サルマタまではかせ

「……しかし、本人同士はまじめなんだろうから、なかなかユーモラスだ。」とは亡き路郎師から頂いた句評。

青森市 工 藤 甲 吉

水だけの胃袋 水の音がする

昼飯抜きで駆けずり回ることがある。そんなとき水を飲んでまた水を飲む。歩くたびに胃袋は音を立てる。カポンカポンと。

鉢巻のそれほど能率あげていず

本日休診が鉢巻などしめてのご活躍であるが「汗ほどに日曜大工はかどらず」からついに「オイ肩をもめと老妻呼びつける」である。

岡山県 本田 恵二 朗
堺市 八木 摩天 郎

中風へ渡すに困まる釣を出し

他人ごとと思えぬ中風症の病人へ、渡さねばならぬつり銭。ふるえた手で受取る病人、とかく人生は川柳的に出来ている。

鳥取市 河村 日満

ズーズー井の人氣内輪が買い被り

ある大会での兼題「人氣」に対する私の軸吟で、あれから一年。私を含めての内輪なるものの考え方に、苦笑を禁じ得ない。

大阪市 正本 水客

大名行列のように銀杏の葉が芽ぶく

緑りの装いを揃えて行儀よく並んでいる銀杏の芽、それは装束を揃えて練って行く大名行列とより感じじょうのない無表情の可笑し味だ。

巨人敗る明日は専務がまた怒鳴る

「きのうはONが当らなかったなァ」「きょうは専務が嫌が悪いぞ」「雷が落ちないうちに外廻りに出掛けるか」

和歌山市 菅井 智水 庵
西宮市 若本 多久 志

たして二で割ればなかなかよい夫婦

こんな夫婦の喧嘩の仲裁には、どちらに軍配を挙げてよいのか迷ってしまう。それぞれ違った短所と長所を兼ね備えていて思わずこんな句が生れた。

ハワイ 築山 快夢 起

口あけた社長の寝顔頂けず

社長の寝顔もちで旅行中、同宿の社長の寝顔は日頃謹厳そのものが今夜はだらしなく聊か幻滅を感じた次第。

ハワイ 池田 泉水

たばこ吸いけなした妻が吸いはじめ

良人の烟草吸いを嫌って何時も文句を云う妻が最近肥りだし、所謂女性の悩みに苦心の結果いややながら吸いはじめたと云うのだ。

岡山市 江 国 幽 谷

意見したあとで大学出とわかり

しまった。彼は大学出であつたのか、あんな意見をしてかえって自分がぐずぐずたくなり、まさか意見の訂正も出来ずと小卒の課長。

加賀市 木 村 一 路

女房の酒量を知ってから酌がず

酒には自信が有るつもりで一夜愚妻と盃の応酬、夜更醉眼に写る妻は僅かに眼の縁を染めただけ。以来晩酌は一人でチビリチビリ。

松江市 中 川 晃 男

合わせ鏡女の執念もて余し

美しくありたいと願うのは女の執念。だが実物を正直に写しているのにそのうっぶんを投げつけられる鏡こそいい迷惑である。

ホノルル 市 岡 暁 舟

大波の打ち寄すようにフラダンス

妙な風に想像しないで下さい。あのカナカ娘の臀部は実に見事で、それを上下左右まったく脳殺的に然かもリズミカルに踊るわ踊るわ。

ハワイ 羽 佐 間 柳 葉

骨までも愛すと言うてもう別れ

ハワイにもこんなのがありますヨ。

ハワイ 三 輪 峯 円

懸命に道化役者の泣きわらい

生きて行くことの苦しい演出ノアメリカの大を以つてしても貧困退治は仲々の難事である。

守口市 村 田 瓢 太

笑うてたお灸にすぎる年齢となり

医薬も効かず神だのみも効なし。人がすすめるものは何でもやって見る。あんなものと笑うてたお灸が今では唯一のよりどころである。

倉敷市 野 田 素 身 郎

天気晴朗なれど足止めされている

「蒲団干しといてネ。それから里から電話してきますから何処にも行かないでネ」日曜日というのに女房殿は御出勤。辛い哉共稼ぎ。

ミニスカート一人よがりの膝を出し

自信あればこそ出しているのに……やれ細いとか太
いとか、とかく男と云うものは……

大阪市 室 谷 鉄 舟
天 正 千 梢
死亡ゼロ手柄のように旗を立て

少なくとも平均寿命まで生き、出来うれば畳の上で
死にたいものを交通戦争で死ぬ人の数がふえて来た。

下関市 桜 川 不 水
蟻ぐらい二三匹なら食っちまへ

咽喉を通過したものは、肛門から排泄される。鰯な
ど、頭ぐるみ胃へ送り込めば、万事整理がつく。況ん
や、蟻二、三匹に於ておや。

兵庫県 河 原 みのる
捨て値とも知らでキャベツは辰巳向き

一糸乱れぬさまを植物の習性と割切れない憐さ。だ
が、昔ながら下積み農民の無力を青白い唇曲げて嘲笑
してる姿かも知れない。

倉敷市 水 粉 千 翁
御参考までに忠告してしまひ

親切がひと口多い？そうなんですよ、兎に角おわび
しております。

倉敷市 井 上 旭 峯
現代はヘチマ根性じゃ暮されず

僅かな収入でさえ一家の生活が出来た時代と、こと
変り、こうも諸物価の値上りでは、のんびりとしては
生きていられぬ。

鳥取県 森 田 布 堂
巻寿司はこう巻くものと巻いて見せ

「駄目ですよそんなに固く巻いちゃーおすしは空気を
ふくまなきゃまずいですよ」と姑が若い嫁に代って
巻いて見せる腕自慢。

今治市 越 智 一 水
さくらさくら僕の財布を空にさせ

正月には少し早いですが、こんな青春もあった。あちこ
ちからはめられた句である。

同人作品

手紙では鶴首行ったらお留守です

大阪市 川 口 弘 生

久米奈良子さんにすめられて、はじめて句会というものに顔を出し、席題「鶴」で抜けた句です。とに角笑声がどっと来しました。

奈良県 草 深 醉 升

秋の夜をうっかりテレビ見て過ごし

いつしか虫の声も聞こえなくなっている。しまったと思う。また来年こそはなどと考えているうちに雑誌は新年号だ。

名古屋 吉 田 水 車

ひょっとすればひょっとするよな春の宵

句意はあえて蛇足の要はない、スネにキズ持つ？大
方諸兄のご想像にまかせます。しかし、そんな余裕も
許されない昨今ではあります。

加賀市 細 呂 木 魯 木

政府にもミスまして凡人の俺だもの

すったもんだで息子の結婚式を終えた。翌日、美粧
院や自動車のチップはとなると、みな忘れている。政
府にだってミスがね……。

新世帯仲人が来て邪魔にされ

大阪市 本 多 柳 志

「オイ何かなかったかね」「合憎なのよ」「お茶でも入れなさい」「番茶も切らしてしまつて」「イイヨいいよ又来るよ、さよなら」

高槻市 若 柳 潮 花

くしゃみしたよおな顔でも旦那はん

お金とは有難いもの。二枚目が逆立ちしても手の届きそうもない、ひとを運れたはる。

伊丹市 小 川 静 観 堂

啓蟄だぞと誘いあわせて出てしまひ

蚯蚓だったか、何虫だったか、土中に一年或は十年
近くも平和に暮らしていて春先に地表に出たと思うと半
年位で死んで仕舞うという話

岸和田市 内 藤 き さ 子

半平太を上手に演って猿疲れ

猿芝居を見るたびに猿まわしのその根気にシャッポ
をぬいでしまいます。そして芸が済めば如才なくお金
を集めにまわるいじらしさ……。

泉佐野市 大 工 睦 夫
披露宴煮~~べ~~漁って酔いつぶれ

味方（嫁方）は他市からの若い飲み手揃い、と土地の習慣を説明す。喰べるのは料理だけ、他は土産、煮~~べ~~意の儘喰べ放題。

福岡県 太 田 湖 平
産院が近いと娘から初便り

夫について行くにしても心許無いのはお産で、第一信も、その話。そこで老夫妻も、洒落のめした事です。雪の新潟寒うなからう新夫婦。

竹原市 小 島 蘭 幸
ラブレター記念にとっておきましょう

僕が高三の時、思いきって片思いの娘にラブレター出したが今だに返事が来ない、この句のようになっていれば嬉しいのですが……。

鳥取市 森 本 法 泉 子
幼稚園一人は山の方をむき

知事公舎の裏山のうえを、とんびでも舞っていたんだらうか。当時の園児の一人だった私の娘も、今年は成人式をむかえます。

西宮市 野 呂 鵜 汀
転んでも目は蝶を追う男の子

最近トンボや蝶が少く子供達は一匹の蝶を見つくと一心に蝶を追いつづけ、石につまずいて転んでも目だけは尚も蝶を追っている。

京都府 大 鶴 喜 由
春という気配が都おどりから

京都は冷える、比良の八荒が過ぎるとすぐ四月、けんな舞台に花笠をつけた祇園妓のあでやかなおどり、都の春はここから来る。

出雲市 原 独 仙
お忍びと見抜いた宿の請求書

商談、御休憩二時間四百円也の筈が減法高いなあと思えども？結構お楽しみになったこと、お安うござんすよ、とは女将の腹の中。

姫路市 隠 岐 不 醉
遠いと思うた六十路染に越し

モウあかん言われ、到底還暦覚束ないと諦めていたが、主治医先生のご努力で、古稀どころか米寿疑いなしの現在主治医先生に謝しこの句を。

岡山県 横山 一声

おちよぼ口つい方言が出てしまい

美人でお上品そうな奥様、おちよぼ口の御挨拶から女同士の話はつい実が入って来て方言丸出しのおしやべりは仲々終りそうにもない。

高石市 谷 沢 好 祐

泡沫の候補へ入れた臍曲り

自民は資本家、カンパ強制の社党も頼、共産は大嫌い、棄権は気が済まぬ。「あんたの入れる人当選した事無いやないの。」となる。

高槻市 福田 丁 路

神妙におच्छよこちよいが悔み受け

悔みを受けるおच्छよこちよいの神妙な顔に、不覚にも吹き出して周辺の尖い視線を一斉に浴び、冷汗をかいたことがある。

大阪市 西 出 一 栄

来客へギョーザのように子はならび

「今日は」「ハイ」と出て来たお母さんのうしろへ、小さいのから順に五、六人ずらり。あら、ギョーザみたい。頼もしき子宝よ、

岸和田市 高 橋 操 子

コッポリがはずんで帰るポチ袋

振袖を着てコッポリをはくお正月が子供には何より楽しい。つい外へ出ては近所の方に、ポチ袋を頂いて親をハラハラさせる。

守口市 羽 原 静 歩

三面鏡時間をかける顔でなし

昨年の秋、奈良の白藤学園で薫風さんに抜かれた句(兼題、時間)披露のとたん、どっと笑いが起ってほんとうに楽しい一日でした。

神戸市 仲 どん たく

金屏風昨日ツイストした島田

M君とK嬢は社内結婚です。交際中ダンスパーティーでも仲良く踊り、今日は晴れの日です。今日の花嫁のおしとやかなこと。

高槻市 傍 島 静 馬

交替で末っ娘訪ねる老夫婦

最愛の末っ娘も嫁ぎ閑を持て余し気味の老夫婦、何彼と理由つけては娘を訪ねることが多い、そこでいざこざのないよう交替制とした。

岡山県 浜田 久米 雄
にんにくの効目ひとりではくそ笑み

これは公然と知られている筈の秘中の秘である。これがこれ程とえらい効目があるかはやって見た人にしかわからぬ。恐ろしきもの。

普通寺市 岡田 拳 法
利権にも殺虫剤をふっておき

一向に、エライ坊主も出そうにないが、もし、良心覚醒剤や、善悪識別ホルモン液ができれば、世界中に、撒布したいものである。

熊本県 有働 芳 仙
成人式十代ママの乳が張り

私は未だ処女ですといった顔、しかし美しい振袖姿の下に秘めた乳房は家に残して来たベビーの顔の思ひ出させる。笑えない現実か？

倉吉市 奥 谷 弘 朗
婿さんをどう呼びましょうお父さん

婿さんの名が達之輔、達之輔さんでは少し無骨、達ちゃんでは小供じみ、どう呼びましょうか？と妻に聞かれて浮んだのがこの句？

呉市 林 野 甦 光
マンションでさんま旦那の好み焼く

一流マンションでも主人の言いつけとあれば仕方があるまい、ワンマン旦那に仕かえると頭が痛い、辺りに煙りを出し乍ら！！

岡山県 藤 原 秋 月
初めから禿げてたように思ったり

昨年一月の岡山県川柳大会に於いて入選した私の作品の中の一句。満場の出席者の爆笑を戴いた句である。

大阪市 中 川 滋 雀
お言葉に甘えて簪立てられる

「まだ早いやないか」ついそのお世辞に乗り、いける口が鯨飲長座の挙句、奥さんのヒンシュクも知らずご機嫌で去んだが。

大阪府 浅 川 八 郎
白足袋を脱いで宮司の飲みっぷり

闘病入院中の私には明かるい句ができませんが、それでも旧作を丹念にさがしました。早く元気になりたいものです。

島根県 藤井 明 朗

我慢づよい妻に病氣の方が逃げ

病氣らしい病氣をした事のない、うちの女房である。
図太い程の？がまん強さに病氣の方がさいならーをす
るらしい。

京都市 松川 杜 的

少うしは秘密があつてよし夫婦

一から十まで妻は夫の、夫は妻の絶てを知りつくし
てしまつては、おしまい、少々の隙があつてこそ本当
の夫婦の味が湧いてこよう。

大阪市 辻川 喜 仙

雲の中月もかすかについて来る

近頃の川柳はユーモアがたならぬように思いますね。
ローマ字の題や句は感心しませんね。時代にあつた句
を残したい。

藤井寺市 西 い わ を

ウェットで御座いますわと仲居さん

その時その場により自由奔放にお客さんに媚を売る
商売である筈なのに計らずもこの仲居さんの本心はウ
ェットでありしか。

大阪市 吉岡 美 房

あんない女を待たすにくい奴

某月某日、某所において……結果は「蹴つとばす石
もなかった待ちばうけ」というところ、作者の顔が見
たいものです。

平田市 久家 代 仕 男

御祝儀が出そうで三味を締め直し

祝儀の打合せを小耳に挟むなり、さあ唄いなはれと
ばかり三味を締め直して、アラエッサツと来た。現
金な田舎芸者の面目躍如。

大阪市 水谷 竹 莊

豊満な乳房へ診察まぶしそ

相手が女性であると、そして豊満な乳房と色気を見
せられると、偉い先生もまぶしそうな顔になるし若い
先生は手がふるえるそうだ。

竹原市 山内 静 水

美しい奥様やっぱり子を叱り

或る日ある時……
あの調子だったら、ご主人までがと、ふと思う時。僕
は倅せだ。

香川 三井 醉夢

母さんの匂いサンブルだけで消え

生来、しゃれっ気に乏しく、シャネル五番等には縁遠い。ある日、鋭敏な臭覚に詰問された。もったいないからとは詭弁。愚。

大阪市 金井 文秋

粥ばかり出されて仮病身にこたえ

腹痛をうつたえて、ずる休みしたまではよかったが、粥責めには参った。早速治りましたと言うのには、いささかきまりが悪い。

大阪市 宮尾 あいき

忍耐の額のある部屋で待たされて

面会時間厳守で来て待つ事十分、お茶が出て又十分、猫が顔出して又十分、帰ろう。腰を浮かした目に忍耐の額の文字。

大阪府 清水 白柳

人類に親近感を持った猿

今年は猿年だから動物園に居る猿などはサゾ立派なモーニングを着せてもらおうことだろう。人類が猿を羨むようになったら世も末だ。

東大阪市 久米 奈良子

こころよいお世辞へ顔がゆるんでき

川雑婦人友の会において山川阿茶先生選による天位の句で、数少い私のユーモア作品。青春の日の一頁が思い出されます。

大阪市 橘 高薫風

長靴の片方どうしてもこける

私の生活にもユーモアがあるのだから、数は少ないながら、このところちよいちよい出てくる。まだまだ1+1=2のユーモアだが。

大阪市 菊沢 小松園

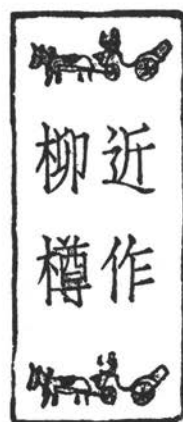
新年の抱負を留置場で書き

留置場に居る間はまだ罪人ではない、彼氏罪を意識せず胸を張り、名士然として、新年の抱負を書く、建設汚職、タクシー汚職等々。

大阪市 不二田 一三夫

公開録音ここで実った老いらくの

どこの放送局にも演芸の公開録音がある。前列の席は常連ばかりでみな老人だが、ここが家には邪魔がれる爺さん婆さんのデートの場でもあるのだ。



川村好郎選

大阪市 黒田真砂

子が寝入りやつと戻った静と寂
赤字苦にしてると思えぬ妻の秋
受診待つうつろな眸にバラ真紅
愛憎の渦にもだえて彼を待ち

梅里先生を偲んで

温顔の目に見える如星光る

大阪市 古川静波

テープ切るごとく新年の顔洗う
悪友は持たず孤独な元旦よ
雪山のまるさは裸女の艶を持つ
今日も犬と話してる平社員の父よ
うかつにも教育パパになつていた

広島県 岩谷二三枝

夕映えの茜に今日の愚痴を捨て
女坂ひとり越えゆく陽を背にす
三面鏡心の汚点晒す宵
菊の花惣菜にして里の秋

人生を塗り替えたい日の苦悩

尼崎市 中谷利美

変屈を銀行さんが讃めてくれ
適材にされて適所を追ひ出され
セックスをまだふしだらと思う妻
病院のスリッパなにかうつりそう
父と子の断層妻が割つて入り

松原市 谷垣史好

銅壺チロチロ秋の夜はゆたか
秋の陽のぬくみ素足になつて受け
マニキュアも濃く短大へ行つてます
朝蜘蛛を見逃がしてやる気の弱り

八尾市 宮西弥生

ラーメンで超過勤務稼いどき
告白にウソがなかった星の夜
久々のデートに変らぬ手の温み
販売へまわされて来た口上手

大阪市 和田痴亭

盆樹の種蒔いていつまで生きる氣の
ロシア毛布近所へ見せる窓へ干し
六法に朱線をひいて夫婦もめ
閑職の余生施錠見廻り火の用心

岡山県 押

目 白 扇

親一人娘一人秋を読みふけり
手枕がしびれてさめたのどかな日
女患部屋夫子供の事ばかり
しみじみと話せば善人ばかりなり

東大阪府 坂

東 若 芽

末っ子のように朝顔秋に咲き
スモッグと埃を被って柿がなり
菊活けて豊かな心柳誌よむ
二三人切って外科医の菊作り

鳥取県 川

崎 秋 女

鉢巻もしやもじもきかぬ値上げる
言うまいと決めたころを誤解され
すてて来たくにの祭りを見るテレビ
大阪の灯はもう懲りました稲を刈る

下関市 志

賀 木 石

さりげない言葉のはしにこめる思慕
胸を張れ腰を伸ばせと天が澄み
てのひらの石があくせくすなと言う
百円の大根おろしが舌を刺し

島根県 堀

江 正 朗

情熱も若さもあって意地もあり
まっ暗な臉の中に四季はなし
旅の子がくれた絵葉書なせて見る
養老院ばなしになってお茶が済み

宇部市 櫛 部

い さ 夢

見られたくない老弱の歩を速め
通勤車つり革にさえ縁がなし
一言のお詫びが言えず狭く生き
テレビさえ持たず家柄なお自慢

加賀市 美穂政め 木 村

季 見 子

無い筈のへそ繰りが出る置換え
山の湯の河鹿へ声も無い二人
夫見舞う(二句)

病室の匂いとなって夫臥す
毒舌が聞ける面会嬉しくて

大阪市 小 谷 葉 子

頬ばって蜜柑畑にいるゆとり
有線に乗って俎はずむ朝
雨無情へちまにかかる音で鳴り
恍惚なお尽きず沈黙の黒い壁

新潟県 高 野 不 二

お年玉うちのしつけをぶちこわし
待合室同病診察して呉れる
歌手の名を子に教わって秋の夜

石川県 同 村 虹 要

旅馴れぬ妻へ夜汽車の肩を貸し
交番の家出へうどん届けられ
花婿はライバルだった祝い酒

倉敷市 小 幡 里 風

大胆なポーズ 女が賭けている
そむかれて真昼の酒に酔いきれず
云い負けて戻れば熱帯魚も沈み

仙台市 平 野 光 道

熱燗に不運を語りあう夜寒
いと器用に生れチンドン屋でおわり
告白をする純情もてあまし

出雲市 王 紫

枯れ葉一つ風に抵抗して残り
福の神金をやるとは云いはらず
金にせんとこが誇りの菊作り

大阪市 江 城 功 雄

脊を向ける涙へ絆からみつく
ゆずり合う心素直に友と居る
惜しみなき愛を病む身に受けきれず

岸和田市 福 浦 勝 晴

十代の恋突ツ走るハイウェイ
感情の丘をはだしてまっしぐら
明日を信じて一パイのコップ酒

姫路市 前 田 芙 巳 代

失しなつた恋の分析する若さ
風船が破れて小さな自我終る
刺もてば刺に挑戦する無言

島根県 堀 江 芳 子

貧しさが何だと言うてみたものの
リユーマチの母が握ったペンだより
光りなき夫の風呂に灯をとます

京都市 大久保 和三郎

子を叱る声も師走は越していた
電線が雪の譜となる鍋のもの
金持ちの悩みをきけば金のこと

鳥取県 谷 無 閑

残業の顔が屋台の灯に集い
豊作にほころぶ父の日焼顔
姑のへそくりうすうす嫁は知り

鳥取市 小 林 由 多 香

寝たきりの母へボーナス握らせる
故郷はいいな虹の裾も見え
不満ぶちまけるに妻の無口なり

大阪市 堀 口 欣 一

ファッションショーのようなが特急車
漬物のうまさもこの鰻めし
うどん屋へ電話狐と狸だよ

岡山県 荻 野 鮫 虎 狼
写真説明一人おいてに僕がされ

疲れたら疲れたでよし妻の顔
婚約の意見で祖母と娘が違い

倉敷市 川 端 柳 子

こう云えばこうなる逢えばそういかず
うっかりとニックネームの久しぶり
フアイト沸く風に向って走るとき

熊本市 高 野 宵 草

よく見れば丸い可愛い妻の鼻
設計図通りに建ってまだ不便
太っ腹などと云われて引っかかり

米子市 八 木 千 代

追憶のなかでもわたし意地を張り
推量で聞いて余分な腹を立て
許す気にさせて灯影が弱く揺れ

竹原市 生 信 笑 子

ねころんで芝生のうわさ聞いてみる
逆ってみたい秋風のさわやかさ
かぎりなき海よ私は生きている

七尾市 松 高 秀 峰

来賓も本物が来る選挙前

百姓の目に慣れあいのストに見え
発車してガイド勤めの声となり

大田市 藤 田 軒 太 楼

見透しがついて旅路の月あおぐ
冷静になれず内心見抜かれる

爪を切る背中へ妻のぐち続く

守口市 田 中 笑 風

カミさんが奥さまになる景気よさ
死んだ気でやれと郷愁を励まされ
手をつなぐ園児三ッ児のように見え

大阪市 奥 川 継 之 助

ジェット機の孤独秋天を裂いて行き
はじらいをそらすビールの栓を抜き
煙草ふかせば女房も悪女めき

八尾市 高 杉 鬼 遊

花でない枯葉はせめて舞うて散り
拓本に落書きもある寒山寺
月を背におろかなおれの影を踏む

京都府 福 村 新 海

保険屋へ断わり続けまだ元氣
助手台に乗ってタクシー払わされ
ギブアンドギブで妻はお人好し

羽曳野市 河 原 林 比 呂 路

人知れず儲けて笑いとまらない
退屈が詰碁の詐欺に引っかかり
頑固さが敬老の日を嫌いぬき

鳥取市 藤 本 征 山

乳吸って来いと賜休をうらやまれ
代表のあいつ成程よくしゃべり
栄進へ言葉使いも変えた椅子

草津市 久保和友

事務不馴れインクこぼしただけのこと

モニターの委嘱とは妻のおおげさな

秋逝くか純白の帆の冴えきって

竹原市 森井菁居

農繁期だけを農家の子に戻り

母と縄綯った日を追う夜のしじま

御世辞にも聴こえることが他人なり

豊中市 河本雪男

母に似た老婆に歩巾ふと合わし

明治の気骨まだ昭和と妥協せず

物価高数字に弱いと云うとれず

鳥取県 鈴木村諷子

靴だけは支店長ほど鳴らせて来

誰のおごりとも判らずに飲んじまい

竹原市 三宅不朽

風紋と影と砂丘に来て対話

産声のハッシと夜の秋を断つ

大阪府 井上美恵子

美しく育ち気ままな母に似る

もう少女父の枕を嫌うなり

広島県 高橋鬼焼

重ね着のマネキン冬へ立ちつづけ

しゃべらせて聞くだけでいい妻のるす

笠岡市 高木洪柿

招待の席へ寄り添う白い杖

辞退しても自慢の新車が乗せて呉れ

堺市 斎藤亜也

安からう悪からうじゃないか特価デー

大根を煮る香初冬独り酌む

鳥根県 小砂白汀

中傷を受け止めかねる咳払い

枯葉落つ不協和音に胃がチクリ

長崎県 吉田季生

慈雨に濡れ釣から帰る父と子と

酒やめたのに慈雨がのめと云う

尼崎市 中溪慶彦

学歴の要らない職へ腰をかけ

もう一人産みたい妻の蒲柳質

諫早市 原田明春

叙歎沙汰うけても還るわけでなし

朝寝坊したのにバスまで遅れて来

八幡浜市 別宮すき

まつたけは高いですよと妻先手

和服での外出姑の知恵もかり

鳥取市 有田とし江

七色に衣替えする山を恋う

バリカンを温めて病夫の髪をかる

竹原市 脇 本 政 己

凡人の幸せあるがままを受け

四十がすぎてうつむく顔となり

小松市 四 方 天 弘 美

子の出番それ行け開店休業だ

我が子故愁の深さもたのもしや

島根県 大 森 孝 華

七五三重なる月賦気にもせず

口止めも酒が言わせるこぜりあい

茨木市 吉 川 悦 子

淋しさ伏せて転動送る母

心ブラヘミニに不向きな足も行く

羽咋市 三 宅 ろ 亭

能登のブリ刺身に友の欲しい宵

家計簿をおいてけぼりに景気よさ

愛媛県 嶮 本 満 子

愛深きひとよ胸毛のふかきひと

枝も葉も伸びたい気持拒ばむ鉢

大阪市 伊 藤 一 雲

もう一度バカを聞きたい秋を逝き

雑巾ならちぎれているとおどす妻

クラス会最後は老後のことになり
嫁げ日の父の表情忘れかね
米子市 林 瑞 枝

増大号出して値上げをする準備
税務署で口程利かぬ友の顔
河内長野市 井 上 喜 醉

金魚売り石やきいもの顔でくる
あれほどに騒ぐ汚職がまだつづき
呉市 横 田 英 詩

貫禄に押されたようにみな黙り
友人宗仁和尚の死
大洲市 堀 内 暁 風

帰命頂礼あの世の姿見えるよう
和歌山市 増 田 次 昭

修繕のきかぬテレビを捨てきれず
人妻といえは美人にみなきこえ
三次市 和 泉 松 風

秋の空風情を添えて柿一つ
冬の風一足早いえりを立て
大阪市 塩 浜 一 路

父の人生 批判している息子の眼
学生のストの後ろで見る学生
広島県 南 条 露 声

すぐ涙する伯母だからいいやすし

校舎だけ昔のままの母校なり

名古屋市 花東 千久 良

視野に佇ちて北風に背を向けず

年輪が囁く喜寿へのパーセント

泉佐野市 大工 静子

昔物と言われながらも手を通し

間に合わぬ親の片身を持て余し

羽曳野市 麻野 幽玄

退院(二句)

病床の孤独な日々も過去となる

よう我慢したなと鏡へ話しかけ

鳥取市 近藤 秋星

空前の大豊作は他所のこと

案の定日曜脱糞させぬ雨

竹原市 簗田 浄美

笑うまい私も通る道なのだ

責任を果した顔の深呼吸

竹原市 出島 静波

仕事着のつくろい冬の速さ知る

とりえ無い男であって平和です

寝屋川市 福富 隆子

家計簿に合うが鯨は買う気せず

表裏ない男だがたよりなし

わが性を嫌だと思う日のつらく

電機器具揃えてメートルよく廻り

島根県 榎原 加代

衣替えてすよと秋風せきたてる

退院

復職を待つ間妻は強いもの

大阪市 大谷 重夫

青空へ男の夢を落書し

網紀肅正通達出しただけのこと

仙台市 川村 映輝

湯豆腐へこんたんの有る酒を添え

貰い風呂落葉の火熱も賞めて去に

八尾市 古川 鶴声

妊婦服時に返事もしなくなり

遺言もない長寿を羨まれ

青森県 岩淵 一星

招かざる客インスタントで扱われ

おごらしておいて鰻井の値にあきれ

高知県 山川 勝子

責任はとります男誓わされ

行きずりにふと手がのびる柿の色

龍野市 森下 峰子

貝塚市 行天 千代

珍客が赤字の家計おびやかし
豆台風うちの標札持って行き

島根県 山 本文子

新薬がまた水虫になめられる

酒好きだったガンの柩へ酒も入れ

鳥取市 山 本 珂也 女

異動する度に母親不安がり

逆境へ亡夫の写真に愚知も云い

鳥取市 谷 尾 虚 風

婿頼むつもりへ婿を頼まれる

痴話喧嘩して秋の夜長が明けかかり

鳥取市 藤 本 佳 女

風流なところを見せたい月を賞め

ロードレースいどむ若さへ湧く不安

鳥取市 河 口 忠 志

断崖をかむ黒潮にある魅力

用心をし過ぎへそくり置き忘れ

鳥取市 藤 本 恵 子

傷リンゴミックスジュースに化けて出た

口答えお客帰れば逃げておく

鳥取市 藤 本 和 宏

母さんだけにやめとこ口答え

親指でたしかめ入る不首尾の日

大阪市 宮 本 地 楽

初辰の縁起の鈴に気も軽るく

ねんごろになつて電話の数がふえ

姫路市 大久保 大夢子

古い切手沢山貼って子へ便り

河内長野市 森 本 黒天子

カラー写真とりたい自慢の菊作り

大阪市 梅 園 摩 耶

手をつなぐムードも消えて子が二人

岡山県 目 賀 芳 月

つぎはぎの紐で小包十二月

竹原市 岩 本 文 晴

ほめられることを予期した顔で来る

堺市 羽 田 一 扇

口利かぬ夫婦幼児に話しかけ

守口市 池 田 豊平次

黒柿が風の便りをほんとにし

大阪市 藤 田 頂留子

安売りのピラで今夜の菜きめる

河内長野市 小 川 耕 人

開運をたくすさい銭威勢よく

竹原市 時 広 一 路

一坪の庭にも秋の風が吹き

ライバルを意識する日のしゃべりよう	鳥取市	鳥取市	鳥取市	切腹が自慢にならぬ病み上がり	霧が降る風も吹きだす別れの日	ワンマンへ黙とうする人見てる人	勤労の日馬のたてがみなでてやり	招待へ義理の借着でなお疲れ	一抹の不安煙草をみんな捨て	お得意は授業放棄に政治デモ	子に聞かせ度く無い姿の儲けすぎ	待合室同病人でうまが合い	式よりも写真の方にひまがいり
	藤	小	小	山	山	高知県	大阪市	笠岡市	奈良県	京都府	泉佐野市	北九州市	
	本	谷	田	田	岡	平	田	谷	松	菊	大	藤	
	鎮	章	ス	ス	本	井	中	本	田	山	工	田	
	也	代	ミ	子	香	露	多	鈍	宇	啓	チ	独	
					芳	芳	幸	愚	宙	吉	ヨ	楽	
								坊	太	天			

セドリック
ブルバード 乗用車専門販売店

尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若 本 真 彦

本 社
 尼崎市長浜下ノ川434
 TEL. 大阪(481)5681(代)
 神戸営業所
 神戸市長田区二番町4丁目2-1
 TEL. 神戸(56)代6725
 明石営業所
 明石船上山82
 TEL. 明石(91)5834

加古川営業所
 加古川市米田町船頭591
 TEL. 加古川(2)5526
 姫路営業所
 姫路市市川橋1丁目13
 TEL. 姫路(22)6145・7820



ありし日の協田勇氏

慈照院道誓覚勇居士

協田勇氏を悼む

橋高薫風

協田勇氏が十一月十三日逝去された。戦後瓦礫の街大阪の教育委員長として立ち辛酸を尽された。苦勞は想像に余りある。

大阪市民川柳大会生みの親として常に川柳の良き理解者であった。勇氏は、夫人の梅子女史が番傘の同人であるに拘らず、非常な麻生路郎最良であった。川柳雑誌社での告別式の日、勇氏は不朽洞の数多くの書架にじっと見入っておられたが、「路郎さんは自分の血肉になる本を残しておられたのがあ。」とつぶやいておられたのが印象的であった。博物館が珍重するような蒐集ではないと云うのである。「路郎さんはこの本を自身でリヤカーで引っぱって、奈良の山奥へ疎開されたのですよ。」とも云われた。

情熱の人なればこそ、情熱の詩人の全き理解者であるのだなと、私はありがたく思ったことだった。それからしばらくして、青森の同人工藤甲吉氏が、路郎先生の霊前に参りに来阪されたので、道頓堀を案内する道すがらご挨拶に上った。勇・梅子ご夫妻で一流

の料亭へ招待して下さった。同道の藤村メ女さんともども私達は、大いに面目を施すことが出来たし、甲吉氏も、元教育委員長の款待に思い出深い大阪の夜を味わわれたのであった。その日食満南北翁の碑の説明をされていた鑿鑿たるお姿。テリヤク犬の審査委員長をされて血統正しい名犬にとり囲まれておられたベレー帽の軽快なお姿。芸能に關しても權威ある一家言を持ち、その發展に寄与しておられたと聞く。私の知る限り、人間、動物、料理、その他あらゆるもの一流を愛し、一流を育てるべく努力を惜まなかった偉大な教育者であつたように思われる。

十月十九日にゆきずりにお宅に立ち寄つたところ、「今日は五日間の許可を得て病院から帰つたところだ。あの身体がたつた三十八疋になつてしまつて。」と梅子奥さんが長期療養の苦しみをかこつておられたが、一月と月を出でずして幽明境を異にしてしまわれた。告別式の十七日、四天王寺東門前の紅葉寺へは、在阪神川柳社の幹部が打ち揃つて参列、心からご冥福を祈願したのである。

正恵方の南海沿線

初詣

住吉大社

住吉公園駅下車すぐ.....70円

1日~3日 新年特別奉納 住吉踊

水間観音

貝塚駅のりかえ水間駅下車.....380円

2日・3日 千本橋と開運大餅まき

＜運賃はいずれもなんばからの往復＞

お問合わせ・南海交通社
(641) 8686・(341) 5038
(779) 8661 堺(38) 0687

南海電車

秀句鑑賞

— 前月号から —

後藤梅志

あるものがあるので蟻の列つづく

(古方)

夏のあつい日盛りに、蟻は列をつくる。小さい蟻、大きい蟻、みな列をつくる。

蟻が列をつくるどころか、かならず何かがあるのだが、それをつきとめるのは、困難だ。思うに、蟻の世界には、蟻の世界だけの営みがあって、人間達に分からせないのだ。

人間から見れば、とりとめのない蟻の動作にも、何か神秘的なものがある。つまりこれは、哲学に通ずるものではないだろうか。こんな風に見れば、蟻の動作も、なかなかたのしいものである。

この句の「あるものがある」は、人間が、しずかに謙虚になった、証拠でもある。

秋風の吹かれるままにおみなえし

(奈良子)

このごろは、女郎花をみることは少ない。秋の七草の一つだ。はぎ・くず・おばな・なでしこ・ふじばかま・おみなえし・あさがお・どれを取り上げても風情があり、昔の歌人を楽しませたことが分かる。

おみなえしの色は淡黄、むかしの人は「蒸せる粟の如し」と云った。女が体をくねらせたような茎の姿態から、女郎花とも書く。この句をみると、女というものはしんが強く、世の中の荒波にもまれても、めったに風ざ折れがしないように出来て、自然の面白さが湧いてくる。

(帰郷して)

肩先へ噛みつきそうなザクロの実

(潮花)

ザクロの実は、甘ずっぱい、人の児を食べた鬼子母神が、それを思い出すと云って、食べるのを禁じたという伝説がある。枝もたわわに熟ったザクロを見るたび、それを思い出しているのを見るたび、望郷の念に駆られたものである。

熟れきって、真二つにザクロが口を開けた頃には、枝がたれ下って肩先に触れそうになる。探って呉れと、ザクロが云わんばかり。それを「肩先へ噛みつきそう」と感じたのは、作者の神経がするどく、詩人だからだ。

不本意な別れタバコとマッチの火

(花村)

かるいスケッチの句だが、なにか物を思わせる句である。「不本意な別れ」が「タバコとマッチの火」によくマッチしたためである。

風のある日、ある街角、目下失業中というようなことが頭へ浮かび、相手は同じ年ぐらいの旧知。などと想像させる。

とくべつに、具体的事実をつき付けなくとも、人間は感情的なものであり、過去があり、未来がある限り、ムードはついて廻る。ただ無為に日を送っているか、いないかが、作句生活を左右するものでは、ないだろう。

トラクへ積むと嫁の荷あつけないし

(旭童)

トラクというものは、積み様によつてはよく積める。引越しの時などは、よく積めるものだと、感心する。

嫁入り道具は、新調ばかりでガラタがなければ、ゆっくり間隔を置き、慎重に積み込んで納まる。さびしいぐらい、意外な感じがするのである。この頃の嫁入り仕度は、田舎ほど派手になり、衣類に百万円位は掛けるそうだが、親御さんの目には、昔に比べ、物足りなく映るのだ。

秋の影老婆と孫と天王寺

(どんたく)

こころ温まる句。四天王寺の境内は、お彼岸や紋日を過ぎれ

は閑散である。老婆や、孫達ちがあるくには恰好の場所になる。

堂塔の影はのびて、敷石の上にも影がおちる。鳩が下りてきて児にまつわる。長閑な影をふんで一時を過ごす、憩いの場所となるのだ。あの雑踏した境内も、こんな日があるのかと不審に思う。この句には、そんな感じが、ただよっているのである。大阪も、まだまだ捨てたものではない。

履歴書へたつたひとつの趣味でよし

(蘭 幸)

履歴書へ、趣味を二つも三つも書くことはよろしくない。ただ一つあればいいのだが、その一つが、なかなか書けないものだ。

誰れしも、二つか三つかある趣味の中から、これかと思うものを書く。それは上司におもねる心があるからだ。趣味というものは、二十年も、三十年もやりぬかなければ、値打ちが出ないもので、それには覚悟がいる。この作者の趣味は「川柳」と書く。と書くととんに、この句に違った良さが出た。汐騒の音うたがえば果てがなし

(紅 雨)

汐ざえの音というものは、ある時は魂をゆすぶる如く、ある時は、索寞と響く。常陸大洗の一夜、夜中に聞いた汐騒えの音は、女中が朝、雨戸を開けるまでは、大雨が降っているのを、疑わなかった。だが、海上は銀波の躍る、正月の元日だった。

この句は、作者の住む土地柄、室戸岬がモノを云っているようだ。作句のツボを掴んで

いるところ巧みだ。

思い出がひろがり虫干しはかどらず

(良 子)

もう、虫干しなどをする時代ではないのだが、「虫干し」の句には過去に名句があり、未だに捨て難い。この句は、作者が女性であるだけ、虫干しをするモノの一つ、一つに思い出がひろがり、果てしがないところに興味がつきない。

衣類をはじめ、身につけるものは戦前とすっかり変わり、柄も色彩もケバケバしくなった。時勢でしかたが無いとは云え、中年すぎの女性にとっては、遺る頼ないものがある。

彼処に一票ここにも三票稲を刈り

(みのる)

面白い句だ。町議候補の陣には、そこらじうの馴染みの顔がみな一票、一票に映つる。急にアインがよくなり、肩を叩いたり、手を握ったりする。見ていて可笑しくなるのである。

街中では、ゼスチャー一つでも用が足りるのだが、田甫では確実な票にしなければならぬと思うだけ、悠長にあるいて居る様でも票の打算は怠らない。頭の中は忙がしく働いて居るのである。「稲を刈り」が面白い。直ぐ怒るタチで胃散が手離せず

(拳 法)

すぐ怒るタチの人は、生活力も旺盛で、胃は至って丈夫の筈である。それがよる年波で、大病もするし、今迄、自慢の胃腸のほうもあ

やしくなってきた。チヨイチヨイ胃散を呑む。医者は余り歓迎しないのだが、ゲーツと支えが下がるのがよくて止められぬ。

一方腹を立てる癖は止まず、周囲の人達をコマラス。その度に、胃散のほうへ手がのびる。ということらしい。年輩も性格もよく分り、ほほえましい句。

ややこしくなりレジスター筆算す

(季 生)

レジスターという便利なものが出来て、指の先でばんばん弾くと、すぐ伝票になつて出るのだが、同時に登録もする。すらすら事が運ばいいのだが、運こばぬときはややこしくなる。

これは電子計算機でも同じだ。データの与え様によつては答えが変る。結局元へ戻すしれないものだ。この句はすらすらと、如何にもありそうな矛盾を句にした、暗示性がおもしろい。

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL (06) 三四五二一四

夜間 064 四四〇八

年 玉

藤原秋月選

除夜の鐘いよいよ年玉出す日が来
初日の出さあお年玉もらえます
上昇の世相にそったお年玉
先ず年始言わせて渡すお年玉
いらっしやいと笑ったお年玉
年玉が欲しいなと思う金詰り
母一人暮れに夜業をしたお年玉
年玉への代表と言うが来る
年玉をねらう挨拶もてあまし
パチンコで子のお年玉はじき出し
お年玉めあて模型屋あいてる
お年玉いただき客に用がすみ
年玉へ孫をどろどろ連れて来た
へそくりを両替えしておお年玉
お年玉幼き頃のなつかしく
父上の景氣を量るお年玉
お歳暮が衣替えしたお年玉
お年玉不足はパパが出すと決め
お年玉取られる家をさけて行く
年玉を催促される程にばけ
年玉で親類縁者値ぶみされ
少ないがストまでやったお年玉
孤兒院に育って年玉など知らず
お年玉にも実績がものを言い
お年玉妻へもはずむ屠蘇機嫌

礎 恵 子 山
幽 聖 谷
和 宏
季 贊
無 明
宵 聖
千 翁
芳 仙
古 方
柳 子
芳 仙
季 生
正 朗
曉 明
勾 門
一 路
露 声
耕 人
素 身
七 面
利 美
加 代

年玉を酔って忘れた年始客
年玉が速達で来る松の内
年玉も予算に入れて里帰り
就職をして年玉は打ちきられ
初めてのボーナス母へのお年玉
年玉もやらずケチケチためて死に
年玉の額も背丈と共に伸び
年玉に高校ですよと予告する
声変りした子も年玉欲しい顔
適齢期まだ年玉をうれしが
お年玉忘れり呉れて祖母達者
呉れそうない人が来ているお正月

どの足もすぐ行きわるシームレス
立ち話又ずれて来たシームレス
シームレス百円均一まで下り
おデートへ百円高いシームレス
おぎれの手にシームレス引っぱり
岩田帯まだシームレスはきたがり
シームレスたるみ電車で眠りこけ
シームレスカラーを替を朝を出る
シームレスはき替えて行くい話
ご機嫌が斜めシームレス丸められ
シームレスと手は無いか大手術
市場籠明日のデートのシームレス
シームレス脱いで一日暮れかかり
よそ行る足に仕立てたシームレス
シームレス自信の足に吸いつかせ
シームレス明治の足のこそばゆい
モンペ足へ馴染まぬシームレス
シームレス苦しがつる健康美
お稽古の尻に敷かれたシームレス
靴みがき生ながらシームレス
はたきにもなりましたシームレス
穴あてはたきになったシームレス
ウインドへ逆ニヨッキリシームレス
シームレス逆立ちをして客を待ち
シームレス続びたまま夜の汽車
シームレスずらしてよれて旅終る
シームレスエロダクシヨンに引かれ
シームレス捜査の素手になって来る
脊丈もう異性の視線しゅり
シームレスいやな視線しゅり
シームレスきらめく若さ組んで

千 翁
利 美
鎮 也
七 面
季 生
季 生
隆 子
誓 二
秋 太
軒 太
白 汀
里 風
白 扇
里 風
惠 二
鶴 声
秋 女
ど ん たく
耕 人
次 昭
弘 朗
雄 声
礎 山
柳 子
里 風
初 甫
宇 宙
庸 佑
無 聖
奇 童
柳 子

シームレス

貯めた硬貨年玉にする札に替え
預けると聞いて年玉はずんどき
孫五歳もう年玉のベアを言い
下心あつてはずんだお年玉
お年玉また成績の事にふれ
口笛を吹いてお年玉の額
千鳥足二度もお年玉を呉れ
年玉をママ預ってそのまんま

多 蘭 子
露 声
十九平
雄 声
素 身 郎
和 友
幽 谷
双 楽
天

谷沢好祐選

課 題 吟

流 行

奴田原紅雨選

流行語明治生れをまごつかせ
流行へ一応ケチをつけたがり
流行におぼれ個性美を忘れ
トップモードおつむの方が疑われ
流行を追うには足が短かすぎ
税務署へ行くには流行らない着物
はやりかぜ僕も人並休暇とる
若いとは倅せ流行よく似合い
流行をまともに追って風邪をひき

加 曉 肖 里 遊 幽 百 鶴
生 代 明 二 風 仙 谷 酒 声

バッグにもシームレスが身だしな
佳
白鳥の脚がきれいなシームレス
シームレス 渚を宿の男下駄
両の手に提げたア臧るシームレス
逆立ちも身売りするシームレス
シームレスも馴れB・Gに恋生る
靴を穿き終るシームレスグッドバイ
地
シームレス脱いで砂丘を駆けま
天
舞妓さん今日は休みのシームレス
軸
脚だけが夏をはいてるシームレス

洛 醉
宵 明
里 風
痴 亭
勝 子
ど ん だ く
摩 耶
恵 子
肖 二

流行が太ももまでも見せてくれ
ミニミニはもうこれ以上あげられず
流行の柄は目先を変えただけ
流行におされのれんの色もさめ
流行をけなして頑固者にされ
ウインドにあるから流行らしく見え
流行が重い石までかつがせる
流行を追うて矛盾に気がつかず
赤い顔させる子供の流行語
流行のおくれをねらう世帯慣れ
酔えばすぐ昔はやった枯すすき
流行へ五体の線がおりあわず
流行の寿命も商人読んでいる
ばつちのまなズボンで父を嘆か
流行が来ようが孤独ふり向かず
流行の服がちつとも似合わぬ娘
更衣室出て看護婦の流行着
流行の風が団地をかけめぐり
流行を気にせぬ妻で物足らず
流行となればスカート寒くなし
流行に反撥して淋しさよ
怪獣を抱いてスヤスヤ子の眠り
流行語新しがり屋がメモにとめ

佳
流行のないうのいいと黒を買い
気の毒はミニスカートも茶汲む娘
又はやる時もあらうと取っておき
流行性ですとマスクをかけたまま
オーバーを着込んだミニで笑わ
人
デザインのミス流行の波に乗せ

伯 扇
無 聖
代 仕 男
軒 太 楼
七 面 山
礎 山
同 風
虚 風
忠 志
比 呂 路
誓 二
二 朗
弘 朗
弘 美
公 輔
秀 峰
芳 仙
豊 平 次
不 二
摩 耶
白 丁
十 九 平

高級洋菓子

プラス

堺市役所前 TEL(2)2334

流行の片棒漫画家も担ぎ章雅
地
天
来年の色を染め出す京の水宵明
軸
流行の罪を痴漢が指摘する

川柳塔社同人

初歩教室

題 — 「休日」

菊沢小松園

本月の休日と言う課題はごく有りふれた題で総体に創り易い方ではないかと思つて居たが、案外低調だった、組みしやすしと見られたか、熱心のあまりか一人で十句も十五句も送つて來られた方もあつたがあまり感心することでは無い、精選して規定通り五句にしておさう。

あふれてる身に日曜の空青く

休日に長生きしてねも酷使され

休日を特価の町のうずにいる

休日はあつても休みのない農家

休日が短か過ぎるも若いうち

①その日の仕事に就けなかつた日傭労務者の態度がよく出ている、日曜日にも休まれぬこの人達には世間からはみ出した僻んだ身にせめて働いて居る間だけ心を紛がらすことが出来ても、いったん仕事に有りつけなかつた日は空の青ささえ腹立しいのである、佳句。

②中七の用語でこの家庭の様子がよく現わされている、使い古された雑布の様を夫の姿も

それとなく想像されて面白い。③これは生活力の逞ましい奥様族の姿であらう、特価ながらも先ずは主婦としての満足感に浸り得る瞬間である、下五にそれがよく出ている。④ちょっと理屈ばいようだが意は判る、農休日は決められては居るが本当の意味での休みなど農家にはない、御苦労さま。

年末の休日きっちり当てにされ

休日の呼出しつらい宮仕え

休日を妻の指図のまま動き

休日は朝から妻に礼言わせ

お隣りは休日らしく釘の音

①年末ともなれば雑用が次ぎ次ぎ、休日はすつかり予定済みである。しかも押しつけられたもので自分の意志ではない、そこに生きて行く面倒臭さも大いにある、この句休日を

通して世間へちよつぱり忿懣を洩らしたのである。②下五に抵抗を感じるがこの場合古い町の旧家などに今なお細々と残っているであらう。所謂、奉公人を現わすために事更、呼

出しと言ひ、宮仕えと言つたのであらうか、年齢が現われている句。③カアちゃん家庭の日曜風景か、中七が面白い、年寄りの居ないということとは平穩に通じることでもある、肯定することによつて平和は生れる。④前の句と同巧である、こは主人公の顔がある。良妻型に嬉しく働かされてゐるのである、悪く云えば立て倒かしであるが主人公はそれに氣附かない、それがこの句の狙いであらう、佳句。⑤釘の音に隣の休みを知る、主人が居なければ釘一本打てない家庭も窺えて面白い。

休日の盆栽手入が追いつかず

休日もない手内職へ励み

休日は夫婦揃うて市場籠

休日がすれ違つて共稼ぎ

休日の子の手も借りる秋の出来

①上五が氣になるので手を入れるつもりが

果し得なかつた、休日だけの手入では、形を整えるのに追いつけなかつた意は判るが句意は浅い。③手内職に休日をダブらしたただけで思いつきに終つた何かを絡ませて深味をつけたい。③これもよく見掛けるところで句は浅い、あつさり纏め過ぎた感じ。④共稼ぎの

職場が違うので休みが一緒にならない、中七の語句がこの句を生かした。⑤見たままを句にただで後味が何もない、例月に似ず格別の句も無かつたようだ。

休日の社長しばしば馬になり

破天

休日は妻の指図で動かされ

誓二

看護婦も休日ただの娘にかえり

秋女

休みあけ物足りなそうな顔が寄り

亜也

日曜日フルに動いた洗濯機

瑞枝

①社長も家に居る時は子煩悩、会社に居る時と似もつかぬ半面は確かに突いている、人間社長の面目躍如というところ、③この句あまりに正直に過ぎた、句に嘘はいかぬが技巧は必要だ前掲、芳子、静観堂の諸氏の句を御参考に。③下五にこの句の重点がある、働く女性もやはり若い娘ともなれば時には着飾りたい一面もあろう、ほほえましい女性心理を巧みに捕えた、佳句。④休み疲れの顔が寄っ

近 詠

大阪市 橋本 緑 雨

御在所 岳

山上でどちら向いても霧ばかり
山上のカモシカも見ず山を降り
始めから雨と知ってカメラ持たぬなり

須坂市 高峰 柳 児

入歯がたつかせかたくなの言い負けず
故郷を見限り出稼ぎしめっぱい

たのである、しかも休みが足らなかったような連中、会社も大抵ではない、世相の一片は現わされている。③休みに働く主婦の姿が見えている、中七に力強さがある、洗濯機が勝手に動いたのでは決してない、省略の好い見本として参考になる。

休日のブラン茶の間で子に委せ

鉄舟

連休へ山の空気が濁るほど

湖平

連休に鍵っ子母へつきまとい

花子

好きな時休める職を羨まれ

千梢

①休みの計画を子等の希望に任せて、ニヤニヤ笑顔で見ている父母の姿も想像されて面白い、勿論一家総出のプランであろう、子供達も相当大きくなった幸せな家庭風景である。②土地の人が見た連休の有様で、誇張もこの程度なら許される範囲であろう。③鍵っ子心理は判るが誰でもよく創る処で事実があ

老夫婦どっちも忘ればくいる笑顔
若者と話題がずれる冷たい座

今治市 長野 文 庫

明治百年しき殺される世と変り
明治百年文盲が無く小うるさい

五十年は素通り明治百年祭

小松市 山上 千太郎

針箱のボタンの数も世帯古り

旅の気まま書店をあさるベレー帽

磨かれて石の野生の貌消える

っても、余りにありふれたものは損だとして貰いたい。④主婦ともなれば世俗の雑用に追いまわされてなかなか休まれぬものだ、それをのぼせるだけと詠んで凡手でない句になった、佳句。⑤句材はよい処を狙われたのだから、もっと突込んで欲しい、何だか上三りの感じ、再考して良い句にされた。

休日にはやあつさり夕暮れる

千代

素晴らしい休日してたベンを置く

千代

マジシャンで疲れた日寝て過ごし

弘美

休日は瓜切っただけ日向ぼこ

すき

電休日文化はとおいものになり

同

①あんまりあつさり創り過ぎた、これだけでは遊んでいて早かったのか、寝て居て早かったのか何れとも判らぬ、読者に気を使わす句は罪だ。②これはよい、手紙か日記か下五の具象の事実を得て、いい句になった、佳句。③この句を見て違る瀬なく思ったのは私だけだろうか、生活科学に反するこの句反撥を感じる、この句の持つ矛盾を突く句にして欲しかった。④ここにも生活に疲れた人世の渋滞を思わす養老院のスナップにしても救いがほしい。⑤家庭電化の行届いた昨今、休電日には全くお手上げだ、中七にこの句の生命を見たい、この題に休電日を持って来た叡智を讃える。

休日のブランヘ子の顔妻の顔

遼者吟

四十三三年二月二十日締切 四月号発表

題「仲直り」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号

菊沢小松園

第百九十八回 (復活第三回)

大 萬 川 柳

財 布

入選発表

選 者 清水 白 柳
投句総数 六百六十七句
入 選 六十七句

倉敷 恵二朗
先代の財布の手垢落すまい

笠岡 桃仙坊
空財布が先案内で飲み歩き

笠岡 遠二
日日好日財布は妻が持っており

和泉 東天紅
これだけを飲ませと財布ごと渡し

松江 鶴丸
財布など買わず手芸の好きな妻

堺 一舟
運のよい財布修繕して使い

豊中 古方
財布入つくとこなど無いドレス

宝塚 ゆきを
あと追うて財布を聞いてくれた母

藤井寺 吸江
大丈夫かと子供に財布のぞかせる

今治 青女
里帰り空の財布を置いておき

八尾 鬼遊
出しにくいところへ財布押込まれ

大阪 文秋

倉吉 弘 朗
嵩だかい財布の小銭から払い

米子 花子
うかつにも財布に入れてバレた金

篠山 可住
まかされた財布へ嫁もけちになり

島根 芳子
もう一軒行けと財布がさざやいた

岡山 照路
旅の子がきっちり使って来た財布

高槻 静馬
やりもを責めれば財布投げ出され

大阪 没食子
中味の札見せるポーズでする払い

堺 草春
仕入れる方の財布は腹に巻き

橋本 木魚
三日日すれば財布はおもちや箱

倉敷 千翁
サラリーは財布に入れるひまも

尼崎 秋水
とは云えど空の財布のおきどころ

財布からみれば男の無駄使い

大阪 滋 細

軽いけど財布を握る座を守り

大阪 生 長

財布しまいかけもう一度値切り

笠岡 要次

悪い気はないが斜に見た財布

倉敷 旭 峯

底の無い財布にも似たこの暮し

宝塚 無 聖

大吉のみくじもよけれ空財布

大阪 鉄 舟

小銭ない財布が市電困らせる

大阪 章 雅

足るだろと高くくっていった財布

岸和田 きさ子

鍵ハンコ名刺へ財布またつぶれ

大阪 弓 彦

小銭入れきっちり胸に夜学の子

賽銭は財布逆さにして探し

大阪 保 夫

財布から一円玉を掃除する

財布ごと渡す中味は知れており

大阪 笑 風

金が要るメモをくわえている財布

千代紙で折った財布を大事がり

財布にも女一人は鈴をつけ

岡山 十九平

財布ごとまかされ妓メニユ見る

誘惑に負けまい財布握りしめ

大阪 形 水

スタイルを崩す財布の入れどころ



ココロ 箋
便



財布から一枚抜いて浴衣で出

西宮 多久志

服替えて財布忘れてきた電車

先輩先輩と財布あてにされ

倉敷 素身郎

財布持ったばかりに財布ごと拘られ

共稼ぎ財布の中を比べあ

鳥取 恵子

重くてもいいものふくれても財布

チヨコ一つ買えるだけでも赤財布

大阪 柳 志

あつち向いて小銭をさぐる女客
ぶっちゃけて見せて得心さす財布
ねぎキャベツ大根財布市場籠

鳥取 代仕男

胸算で財布に合はす市場籠
旅慣れて小出しの財布別に持ち
承知せぬ孫へ財布の空を見せ

萬好 郎

僕払う払うと財布さがす振り
やつとチップくる財布へ目をまじ
ハネムーンもう花嫁が持つ財布
後悔と酔いが残った空財布

住

飲む会へ財布へへそくり足とおき
大 阪 あいさ

ポケットを財布がわりの小商い
下 関 木 石

心細い財布で奇遇についてゆき
大 阪 小 路

近 詠

今治市 月 原 宵 明

菊人形どこか冷たい翳を持ち
簪目のきれいな線へ銀杏散る
定年の靴磨いても艶が出ず

全学連

うちの子が写りはせぬか大鳥居

持ち馴れぬ財布懐手が握り

大 阪 静 波

終戦以来財布を持たぬ男にし

人ノ句

米 子 瑞 枝

鱗つく財布が養子へ引き継がれ

地ノ句

大 阪 継之助

階段の途中で財布たしめる

天ノ句

尼 崎 慶 彦

貴重品といわれる程もない財布

選者吟

ダブル着て折らずに入ら財布持つ

大萬ベストテン(十二月現在)

(同点の場合は投句先着順)

素身郎

ゆきを

秋 女

弓 彦

八、〇 倉 敷
六、〇 宝 塚
五、五 鳥 取
五、五 大 阪

大洲市 米 沢 曉 明

一人旅一人で酌いで飲むもよし
汽車にゆられながら入念の化粧室
息かけて押したは金にならぬ判

和歌山市 秋 月 宏 方

火あぶりの鯛を並べてめでたい日
易者の灯はそばそ生きている姿
飯上手にたいてかいしよのない男

五	好 郎	五、五 高 石
六	千 代	五、〇 米 子
七	十九平	五、〇 岡 山
八	代仕男	五、〇 平 田
九	照 路	四、五 岡 山
十	慶 彦	四、〇 西 宮
十一	多 志	四、〇 鳥 取
十二	日 満	四、〇 大 阪
十三	形 水	四、〇 大 阪
十四	草 春	四、〇 大 阪
十五	継之助	四、〇 大 阪
十六	清 人	四、〇 大 阪
十七	吸 江	四、〇 藤 井 寺
十八	きさ子	四、〇 岸 和 田
十九	没 食 子	三、五 大 阪
二十	静 馬	三、五 高 槻
二十一	静 波	三、五 大 阪
二十二	珂 也 女	三、〇 鳥 取
二十三	滋 雀	三、〇 大 阪
二十四	青 香	三、〇 堺

二五	正 朗	三、〇 鳥 取
二六	弘 朗	三、〇 倉 吉
二七	文 秋	三、〇 大 阪
二八	美 房	三、〇 大 阪
二九	保 夫	三、〇 大 阪
三〇	柳 志	三、〇 大 阪

ベストテンはご覧の通り僅少の差で競り合っています。まだ第三回目でこれからです。全没の方も多いようですが、天と地に抜ければ一挙に七点入るのですから、新春と共に、梅里賞、ベストテンを目ざし、大いに挑みましょう。(好郎)

第五回「満期」五句以内 締切 一月二十日
第六回予告「素通り」五句以内 締切 二月二十日
投句先 大阪府高石市高師浜三丁目五ノ六 川村 好郎



タチカワペン



優雅な書き味

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼中島生々庵主幹執筆の(大阪保険新聞)川柳講座が近く出版される。なお山陽新聞の柳壇を三カ月交替にBKの川柳は一カ月交替。十二月六日には和歌山七面短詩型文学クラブへ柳話と最近の身辺が急に多忙になられた。なお鷺羽川柳大会には本田恵二朗氏宅へご夫妻で一泊、恵二朗氏のご厚情をよるこんでおられる。▼若本多久志氏は一月二十二月に渡米される由、アメリカみやげの川柳がたのしみ。

川柳人クラブに関する協議を持った。
▼大森風来子氏帰白歓迎第二回岡山県川柳大会は昭和四十三年一月二十八日(日)午前十時から岡山県邑久郡邑久町尾張邑久町公民館ホールで開催。兼題は、明ける(逸見灯宇選)希望(服部十九平選)花形(丸山弓削平選)腹(本田恵二朗選)執念(田中好啓児選)女(大森よしえ選)外遊(光岡早苗選)結婚の条件(池田あや子選)パトリール

▼坂井三葉選(風(木村三郎選)、投句メ切は出席者も全員一月十日まで。各題三句を岡山県邑久郡邑久町真徳白百合会嘉数裕江宛。
▼昭和四十三年は柳都川柳社(新津市)の二十周年記念に当る。思い切った企画を練っておられる由、大いに期待される。
▼新進同人顔見世句会(東京番倉川柳社)は京都の顔見世興行より一足早い十一月六日(月)午後五時半から開催。
▼第四回さいたま雑詠賞は吉田トヨ子さんが入選、佳作一席には岡部日出、佳作二席には井上梨花のお二人が選ばれた。
▼川柳ジャーナル十二月月号は一九六七年自選作品特集号を発行、八十八名の作品

が掲載されている。
▼札幌川柳社創立十周年記念川柳作家合同自選句集の作品が募集されている。作品は新作旧作を問わず十句、用紙自由、氏名(雅号)都道府県名を記入、参加料三百円、締切りは昭和四十三年三月末日。六月号に発表予定。宛名は、札幌市水車町二丁目石山アパート嘉瀬信彦。
▼札幌川柳社創立十周年記念誌上川柳大会は兼題、心配・遠い・はじめ・隣り・声・独立・妻・恩・交還・進む、各題別紙、縦十八横、横七種の句箋に住所氏名雅号を並記、投句料百円(発表誌希望者は百円追加)同封の上、一月末日迄に札幌市北二十一条東三丁目札幌川柳社宛。
▼時の川柳(神戸市)春季誌上句会の兼題は朝日・叫ぶ・階段・腕・流れ、各題別紙三句宛、原稿紙半載に記名の上、一月七日迄に神戸市兵庫区神田町四〇時の川柳社誌上句会係宛。会費七円切手五枚。
▼川岡雪眼子氏(諫早市同人)が主宰されている諫早川柳文化会の会員、島田破竹氏と江副卓二郎氏が文芸

大会で優秀賞を獲得。
▼築山快夢起氏(ハワイ同人)から「カロ女、紅溪さんがレギュラーに投句されて、小生も大いに喜んでおります。皆さんよろしく。
▼河村日満氏(鳥取市同人)は非農家でありながら夫人の里の手伝いで毎日が稲抜き疲れ、会社や役所へ出る日の方が余程楽で、会社で



マイペースで飲もう

アサヒ
スタイナー

疲れ癒しをしてもらえる
由。

▲山田季賛氏（高槻市同人）
は十月二十九日大鉄川柳会
吟行（京都）の投句をすま
せ、西国三十三カ所巡りの
香草堂、六角堂、六波羅密
寺、清水寺、今熊野を拝し、
十一月五日は安土の観音正
寺、長命寺を巡拝、綴宮正
田舎へ立寄り、帰宅され
た。「長命寺石段の数あり
がたし」

▲野村味平氏（加賀市同人）
から那谷光郎氏（石川県同

人)が十月初旬屋内で転倒
以来病臥静養中で、右腕右
脚の自由が利かない由とお
報らせがあった。速やかな
ご快癒をお祈り申し上げ
る。

▼河相すゝむ氏(西宮市同
人)は胃潰瘍手術の経過順
調で十一月十八日に退院、
神戸大阪へも散歩がてらに
出掛けておられる。

▼磯野与志氏(兵庫県同人
は毎月柳志の届くのがたの
しみで先輩の作品を
読むばかりでとても作句出

来そうにはありませんが、
「二科展を見て老腰が伸びた」
ただけ。

▼村上春巳氏(奈良市同人会)と橘高 薫氏は十一月十九日、生駒の蘆乃先生を訪問。奈良の白毫寺、新築師寺辺りを散策秋の半日を楽しんで

だ。

▼東野大八氏(岐阜県)は第五回三重川柳大会で「体験からみた川柳」を講演、好評。なお石原青竜刀氏も講演され、大八氏と共にシニアボジウムに講師として、も深い感銘を与えられた。

▼森本良夫氏（大阪市同人）氏は十二月六日逝去された。氏は通信病院の鳥か辻川柳会の中堅として活躍されていた。謹悼。

▼辻晩穂氏（川柳オホー一ツク主幹）から編集部の一ツク夫氏宛に「一路郎賞、川柳搭賞の宛に作家をことしは倍作りあげたいと思います。白柳氏のご無沙汰しています。が、よろしく」と。

▼浜野奇童氏（岡山県同人）

平和記念会館での講演に漫才作家くらぶの方々と同行され、敵島神社等へ遊ばれた。▼橋本緑雨氏（大阪市同人）は十月二十七日に湯の山、御在所岳へ登られたが雨で展望できなかった。▼八木摩太郎氏（堺市同人）は十二月十四日、川柳に表タリキクラブで「堺柳に表れた義士と堺」を講演、好評だった。

▼堺川柳会の一ヶ月会は二十三日午後六時から摩太郎氏宅で開催。兼題「みくじ」。

「初荷」「糶」

青野遊仙

笑痴·白柳——推薦

和海草春

笑痴·好郎—推薦

高橋 千万子

笑痴・好郎—推薦

岩本雀踊子

小松園・白柳—推薦

▼関戸宗太郎氏（石川県同
人）十一月六日に大学病院
で食道狭さく、胃カイウウ
の手術を受け、同月末には
七分粥が通るまでに快方に
向かわれたとのこと、ご全
快を祈ります。―鼻からの
食事にたえるあぶら汗―宗
太郎

▼パイロット文字さんはハワイイロー社の柳人では、このたび東京都田無市南町一ノ三ノ二、角替方に転居。

▼杉原愛鳩氏(竹原市同人)の尊父が十一月二十三日逝去された。謹悼。

▼前田芙巳代さん(姫路市)が自動車の技能試験にパスされた。本社の小谷葉子さん、女性ドライバーである。

▼不二田一三夫氏は十一月十九日、秋田実先生の広島


 疲れ
 肩こり
 食欲不振
 つかれ目
 神経痛に
 多々多薬品
アリナミン



本社十二月旬会

会場 自安寺
八日 午後六時

十二月八日といえは悪夢を思い出す第二次世界大戦へふみ込んだ日である。こんな日にこんな楽しいひとときがあったのだ。川維時代よりたしかに句風が変ったようである。新人がふたのもこういうところに原因があるようだ。

古方氏の柳語は、ご自分で天位に入賞させた句が三回連続で天の天になったよろこびを語られた。たしかにめずらしいことである。柳歴三十年の選句眼のたしかさであろう。

四十二年度の句会賞杯は羽原静歩氏が三回掌中におさめられ、ここに堂々永久保持ときまつた。おめでと。海士天樹氏とせり合っただけに感激もまたひとしおというところ。姫路の笑巳代さんの十一句入選が目立った。九後三十分開会。

(河井庸佑整理)

出席—与呂志・梶吉郎・双葉・天笑・一三夫・静歩・加仙・摩太郎・一栄・文秋・多蘭子・武助・貞山・白柳・遊仙・薫芳・文秋・多蘭子・金三・万的・天樹・一舟・生々庵・千梢・喜恵・笑痴・知恵・瓢太・三司・柳志・水客・滋雀・花梢・誓二・好郎・露芳・静馬・白溪子・たつみ・三求・笑巳代・柳宏子・凡九郎・一路・古方・吸江・肖二・綾女・弓彦・葛城・形水・亜成・宣介・清水・多久志・操子・幸代・清吉・舟遊・季賛・葉子。

席題「ジングルベル」 橋高薫風選

ジングルベルおもいおもいの忙しさ
二次会ほらとジングルベルが鳴る
お寺からジングルベルを聞えてき
散髪屋で昼のジングルベルを聞き
病室の窓でジングルベルを聞き
ジングルベル縫うて忙しい救急車
おしっこは言えジングルベルも児
ジングルベル聞はちヨッピリ若く
ジングルベル年越すメドが立たぬ
ジングルベルバスの乗降場で遠く
ベニヤ板ジングルベルをはね返えし
ジングルベルサンデルの面道化めし
ジングルベルリズムにあわめ干鳥足
ジングルベル終電ざりぎりまで遊び
義理人情ジングルベルへあててだし
ジングルベル一と足先に来る施設
ジングルベル景気良くと悪くとも
ジングルベルまだ赤旗が立っている
三味線でジングルベルの忘年会
ジングルベルケイの嵩を見もべる
ジングルベル私ひきの夜にする
ジングルベル隣りはやけに鳴る太鼓
肩叩く手をジングルベルに合はとく
ジングルベルまだ決算がすんでいず
ジングルベルそれからさきは風と
教会の窓はしずかなジングルベル
本番でジングルベルは疲れとり
夢はよぶジングルベルにあらざるや
ジングルベルもう胃袋がうつかない
ジングルベル今年も十字架うつたま
ジングルベルチップチップ聞か女給
ジングルベルお稲荷さんも小さく
弓静彦 馬彦 庵彦 九郎 遊方 志客 三司 白柳 花柳 多志 久志 柳志 清人 笑痴 白溪子 一三夫 笑巳代 一三夫 好郎 知恵 千梢 生々庵 万柳 弓彦 吸江 江彦 的彦 万彦 万彦 万彦 吸江

だしぬけの音はジングルベルだった
酔いぎめをジングルベルが追い帰し
ジングルベルうちのお店はひまに
迷い子の知らせに停るジングルベル
ジングルベル戦を知らぬ瞳がきれい
ジングルベル小々な闘志失わず
ジングルベル師走は上り坂ばかり
席題「逃げる」 海士天樹選

他人さの戸籍へどつかとあぐらかき
逃げる熊勢もう整っている金魚
逃げる気ないのに貧乏神いつたれず
逃げるから追う習性を忘れとり
逃げる手もいつか覚えた酒を酌ぎ
逃げるの事だか結論にはふれず
逃げるにも上手下手ありあけなし
上役に上手に逃げるコツ習う
いざこざに逃げるチャンスを見失
逃げて来たへ仏は無口でおわしまし
時刻まで 逃げて青春棒にふり
逃げ腰でヤシをのぞくも十二月
逃げる者は追うな意地がある
風船が逃げた背中の子の重み
犯人の逃げた足取りが追ひ来る
街を逃げた宅地へダンプが追来る
逃げるだけ逃げて地球の中に居る
観念をしたかしました逃げません
逃げたらちよと素直でなかったな
足早に逃げて女に過去があり
好きだから通れる迷いを持つ女
逃げかくれ出来ん女だから強く
逃亡者に向ける銃口だからにふり
人生の逃避は妥協の日がつづき
逃げきって秒針のない世界
逃げて逃げてサンガラスの底にいる
手の平を逃げる水にも朝がある
水静彦 笑巳代 一三夫 舟遊 武助 武助 多蘭子 柳宏子 万彦 白溪子 白溪子 千梢 一三夫 天笑 多蘭子 文秋 季賛 季賛 滋雀 笑巳代 肖二 弓彦 弓彦 弓彦 古舟 幸彦 滋彦 静彦 静彦 静彦 古舟 古舟

逃げる事やめれば太陽が真上
愛情に餓えて逃亡の影ささむ
逃げられぬ心の隅の子守歌
灯を逃げて馬鹿と云われたひとり旅

席題「値上げ」

岡橋宣介

多志

彦志

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

白彦

柳彦

求彦

痴彦

み彦

路彦

柳彦

城彦

司彦

客彦

助彦

武彦

水彦

葛彦

清彦

一彦

笑彦

飲んで出て飲んで帰ったためたない日
転んでも吉日だから気にしない
かつぎや吉日待つて行く祝い
更けた夜に燗燗の荷みる母よ
吉日を無駄に過した二日酔い
吉日へ母も序に借る衣裳
吉日へ新婚列車送る群れ
吉日と決めて世話やきもう走り
吉日の涙は最初に母が見せ
大安の雨喜こはれ荷がとどき
茶柱がたつて見合にはすると決め
美容院へ出前が急ぐ大安日
入居日は吉日にする空家賃
アルバムに吉日とある晴れ姿
大安を信じて嫁の荷がきれいに
吉日に猫まで鯛の頭付き
嫁の荷がハイウェー行く良い日柄
吉日へ母も嬉しいしつけろ
吉日ばかり続く浮世は味気なし
吉日へ羽目を外した日の安堵
吉日がどうのこうのと母が居る
降り込みの雨吉日をうれしがり
吉日の娘だ今日は叱るまい

兼題「土」

阿万万
的選

農薬へ蛙育たず草萌えず
城壁は無言狭間の土の色
井も便器も同じ土を練り
逆境へ女ながらの土仕事
ランナーの余裕スパイクの土落す
土つて夕日の庭へ父帰る
縄文の遺跡が土の香を放つ
土つけた筍春の店になり
鉄入れ式申しわけはど動く
せい一ぱい土押しあげた霜柱

芳好 一多 静蘭 綾女 与呂 花三 滋雀 柳志 眞形 喜操 柳志 生々 金三 清人 摩天 郎 子 栄 仙 女 志 夫 三 代 志 子 水 歩 子 志 郎 八 已 代 郎 正 芳 芳 天 静 形 操 柳 志 郎

一日が終えたショベルの土落とす
名を力士とてと払う肩の土
名を遂げて異郷の土の冷めたくて
土で肥え大根白い首のはし
事故現場検視が土へしゃがみ込み
ショベルカー腕一杯に土を掻き
凍土ゆるがせ草芽が春をせき語る
土と共に生きた老翁の掌が語り
吟味した土のわりには小さい菊
出土品土の温く味を忘れかね
ベッドから試歩回復へ踏み大地
地下鉄の土を夜中のダンブカ
肩書がとれて故郷の土を踏み
街路樹の根元に都会の土の色
万博の理想へつづく土けむり
暖冬異変路の芽冬の土を割り
町面の土かじり取るサーベヤー
千年の土に墳輪の忍従史
来年の菊床つくる土ぬくし
養鶏の匂いがブンと土に浸み
松茸の菌糸ちよつぷり土を抱き
土捨る人間国宝世を忘れ
荒壁を乾かすつもりで年を越し
酔うてもズボンの土は払いのけ
名を叫び土に頼つく墓参団
幸運な土は神器と崇められ
百姓を踏む足へ可愛い松葉杖
百姓のせがれが土をきたながり
土を選ばずコスモスの色褪せて
ビル街に土を見つけた霜柱
団地出て土やわらかいものを知る
掘り出した土の匂いに冬が匂う
石仏にかがめば秋の土匂う

静馬 遊仙 眞巳 白山 白溪 千久 弘美 加山 眞仙 白露 柳志 生々 一路 たつ 遊仙 摩耶 多蘭 白溪 章雅 泉吉 花梢 葛城 軒太 柳志 白柳 万水 的客

兼題「メーカー」

清水白柳選

メーカーの下請の下で生きている
メーカーにドラマちよいちよく切る
メーカーの高さを買うの見栄のうち
メーカーと一字違いの特価品
大メーカー町工場からのし上り
系列にはいつてメーカー見直され
メーカー品値切る師走の風寒く
メーカーは冬夏を逆さにして生きたる
メーカーはともかく売店からみ合
メーカーの意地売店からみ合
メーカーの匂いが鼻につく寄贈
メーカーを泣かして派手な特価デ
商店街さびれメーカーのビルが建ち
大メーカーの宣伝場末で物が売れ
大メーカー政治資金はポンと出し
メーカーの名が伏せられた事故の記事
値引せぬからメーカー品かと思
アフターサービス出張料ちゃん取
メーカーの頭の鉄と人
メーカーの見学良い所だけを見せ
ラブメーカーなどと冗談めかしとく
メーカーを信じ半煮えめしが出来
メーカーは社名を入れた車賃し
メーカーの自信不可能にいとむ
メーカーの悲哀はテレビからも消え
メーカー品だとは自分に云いかけ
メーカー品仕上げて社名入れただけ
アフターサービスメーカーはど潰
チャンスメーカーの一言を聞きす
メーカーの名に下請は忘れられ
笑いのメーカーを自負とて学を捨て
粉ミルクメーカーまかせで子を育て
メーカーの値が交渉のメドになり

白柳 生々 文秋 美代 滋雀 露客 水夫 美代 肖二 水客 綾女 宣介 柳宏 滋江 摩天 千三 静司 滋雀 柳志 弓彦 操子 眞山 頂留 摩耶 日満 どんたく

各地樹壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

岸和田川柳会

高橋操子報

買いすぎた氷へ病人氣をかい
 彫りあげた氷と見えぬ出来をほい
 氷屋へ夜中をわびて頼む熱
 金のある時の仲よしじきにはげ
 暮しよくなつたか夫婦仲がよし
 なかよしも疎遠になつて適齡期
 金持ちの子と仲よして氣を使い
 内幕を知つて話に乗つてこず
 内幕のボロを見せないママの見栄

ささやま川柳会

小島無聖報

白光子
 三志郎
 かつら
 好郎
 武助
 操人
 瓢子
 加仙

呼びつてゐる子供が親に意見する
 たつお
 茂江
 近江
 田江
 天高くこちになつて何かある下心
 梅枝
 秋空の遠路来る鳥帰る鳥
 可住
 秋空の碧がボトリンと落ちそうな
 可住
 秋空を行くふところにある詩集
 初音
 秋空に野心をみんな捨てて佇ち
 生郎
 夫婦らしこほれを拾う雀二羽
 ゆきお
 理に負けた怒りわなな酌きこほし
 可住
 隣りから秘策こぼれてゆく選挙
 頼三郎
 一つぶの涙こぼして親に勝ち
 村雨

永断聖香清無
葉麥えこきましたと効目には触れず
さきがあつてもなぐても十字切り
呼び捨ての小さな声に涙ぐみ
齢五十呼び捨ての旧知すになく
呼び捨ての出来ぬ淋しさ一人っ子
呼びすてへ呼びすてて来る仲であり
無鬼

南海電鉄川柳会（大阪市）辻圭水報

捨てられたように貨物の荷が並び
梅田駅ここ大阪の台所
積残されても貨物はじっと待ち
ろいカル線貨物の方が巾きかせ
急行に邪魔がられてる貨物なり
浜松の貨物はきれいな音を立て
貨物車でもよかった脱線記事を読み
一番車客も貨物の合いになり
すれ違ふ客物列車は木のなか
駅止めが情力ではいる貨物線
荷主ではないが積替へ腹がたち

摩天郎
季替
天和郎
笑水
貴山
金三
仙

酔うほどに青春回顧の軍歌あり
 グランドの白球青春ここにあり
 青春の夢もあつたろどやの人
 ほろ酔いの機嫌を分けるすしみやげ
 旅帰りの内緒のみやげが一つあり
 上げ底にだまされまいと買うみやげ
 両親の青春箏笥の隅にあり
 青春時代あと僅か高くてず
 銭例を貰つて土産だくつき
 駐留軍黒い子供置き土産
 お土産をひろげたままの旅話
 倅せもみやげも一杯ハネムーン
 青春をのみやげに無情の雨を知る
 青春の姿我が子の影に見る
 青春もまばろしに見える年となり

青 忠 敬 敵 太 稔 秋 凡 聖 隆 雅 梅 秋 浩
 平 春 花 郎 藏 吉 代 啓 聖 隆 雅 梅 秋 浩
 平 春 花 郎 藏 吉 代 啓 聖 隆 雅 梅 秋 浩

どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎輯

青春を雲行くまに我も行く
 青春の夢も時代にかき消され
 土庫にして渡したつもりが誤解され
 欲しくない土産に笑顔の頭下げ
 土産物お腹の中にしまい込み
 花嫁を手土産がわりに帰郷す
 大げさなジョーグこちらがあと出し
 青春をゴージャスで終える気
 好

あすなろ川柳会（大阪市） 川村好郎報

自慢げに教えたジョットがチヨロ
 もうネタのない程自慢を云って去に
 裏表日曜大工のかんな傷
 弓彦

九
 比呂路
 夕
 安
 秀
 ひろみ
 ネホ
 いわ
 好
 百
 酒
 ゆき
 彦

団体の慰安旅行、新年会
御家族そろっての余暇利用法
結婚式から新婚旅行まで
旅行宴会のことなら御相談下さい

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシ トラベルサービス

本 社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6 9 5 1
大阪営業所 大阪市北区曽根崎新地2-30東ビル
TEL 06 (341) 2 8 1 2
守口出張所 守 口 市 京 阪 本 通 2-18
三洋電機㈱本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

飲みすぎでみるのも秋の酒なれば
裏表ひっくりかえしてカレイ買い
裏表知って家裁の如才なく
素美子 恵美子 好郎

まるべに川柳会(大阪府) 川村好郎報

けなしてはみたが未練のある話
聞いたほどサレビスもどけルコ風呂
見合写真片々端からけなしとき
嫉妬心ほめるつもりがついけなし
会う時は笑顔かけではけなしとい
定期券のぞけは意外彼女年が上
逃げ場所が無いので長い長い風呂
不肖の子人がけなせばが腹立ち
けなされても反省出来る年となり
扇郎 陸児 太子 世斗 児

ウイロー社 (ハワイ) 築山快夢起報

苦節十年やっと名刺に箔がつき
重役という名の名刺太く刷り
重役の名義はよいが荷の重さ
重役になっても女逆らう気
重役の逃避を狙う探訪記者
重役の椅子にエリート夢で座し
重役に父ちゃんという顔もあり
独身の魅力も空し秃げかかり
独身の寝室バザーにさも似たり
お隣りはまだ独りかと聞いて去に
独り身で通すつもりか犬を飼い
独身がドライにさせて姥姥
もう嫁けと人も云わない四十過ぎ
独身といわねば喰えぬ職を持ち
独り身の降れば寝ている気楽さよ
初恋に破れ独身押し通し
鶯を鳴かせて独り茶をすすり
素美子 恵美子 好郎

オーエスケー川柳会 大坂形水報

新学朝祝福のペン光ってる 雄元

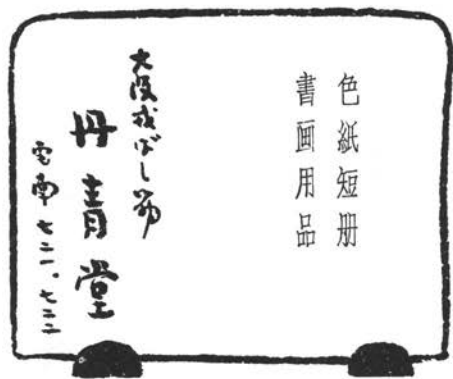
フレッシュなインクの香りにペン
高かった火の見やぐらがビルの下
ビルの街つぶされそうな屋台店
昔から目印のビル小さくなり
隣より一階高いビルを建て
ビル出来た被害テレビが写らない
宇宙船に夢を抱いている若さ
我一人力のなさに天を知る
天高く米の値上り身はやせる
天のように上から物をながめたい
天上の久米仙人もヌード麻痺
無念さを天を仰いでこらえとり
天高くミニスカートの濡歩する
草に寝た魂天に吸いとられ
古寺の闇いつまでも釈迦は天を指す

不朽氏川柳塔賞受賞記念 静水報

ピョンピョンとカエルのあをうけてみる
秋の名残へ真赤な柿一つ
全快を祝ってくれる友がある
魚つり兄貴はガールフレンドと
白菊を活ける女の白き指
せつなくて湖水の水も枯れ果てて
後作は花の盛りの茄子を抜き
菊人形ミニスカートの白き指
浦島の心にも似て佇つ母校
出づ腹へ美容体操すすめる娘
子や孫に囲まれ母の隠し芸
平和とは鳩が飛び交うことかいな
薪もやす匂い故郷を思い出す
張りつめた根気嫁が来てゆるみ
安心をしきつておふのまみ眠り
白い歯を見せつて不敵な面構え
母と縄縛った日を追う夜のしじま
やわらげる怒りの一つ瓜をつむ
全快をいたわるような飯の盛り

白木仙一 神重博 健丸 形智 誠 東 亜
柳 石 夢 扇 田 広 泉 坊 山 水 露 也 勝 成

洋水 勝彦 康彦 宏子 紀美子 浄美子 経子 操子 輝子 笑子 凡子 不子 其子 己子



丸ぶちの眼鏡明治の目が光り
水青く躍らず眠る二級峽
鍵ツ子に秋の陽ざした馬鹿なこと
考えて丸出した屋台の人間味
方言を丸出した屋台の人間味
議長一任これが日本の民主主義
血まみれになる敗北も俺になし
性格をガラリと変えて恋進む
山の朝だあれもない夜まで
全智全能絞られ敗れた日の孤獨
日本も水準に來た交通禍
郷愁へせめても月のない夜なり
生風馬の目を洗うもの乾く
仲間からはぐれ松茸匂うて來
好きですと言わぬ二人で好き同士
静英 清太 鬼太 泰人 笹幸 静火 雅鳳 春昇 芳泉 則則

青春の恋も知ってる熱帯魚
鶏頭の朱さを君の胸に刻つ
「旅路」いま見てるであらう旅ひとり
朝雲を信じ布団を妻は干し
一瞬をかけた火花が美しい
菊匂う机たのしくペン進む
静和康
静水尾
天石庵
扇水
紫苑荘

大坂市民文化祭川柳賞作品

席題「しぶちん」丹波太路選

しぶちんに徹し独身おし通し

席題「カメラ」西尾榮選

果ごもった鳥へ根氣のいるカメラ

兼題「大阪いろいろ」青木三碧選

梅新のあたり人魂二つ飛び

兼題「地下街」岡橋宣介選

雨宿り地下街で飲む昼の酒

兼題「人形」北川春巢選

菊人形の足袋は風邪ひく程に濡れ

兼題「小説」堀口塊人選

小説の女戦う運命もつ

兼題「万国博」片山雲雀選

日の丸が万国博に美しい

重田直三洞

瀬尾 照一

川口 弘生

貴田 兼造

辻 よしお

福島 郁三

大谷 静夫

☆常任理事会

▼十二月四日に常任

理事会が開かれた。

句会杯同点者が出た

場合は、天位の入選

数で決定することにな

った。

▼新春句会は七日一

時から開催。短冊交

換会や句会閉会後同

会場で懇親宴をもう

け会費七百円、早い

目に好郎氏宛へ申込

まれるよう。

▼一月十四日二時か

ら本社階上で「女の

座談会」を理事会が

企画した。司会・多

久志、オブザーバー

として生々庵、好郎

薫風、記事・古方諸

氏。これは三月号の

記事になる。

▼出席―薫風・多久

志・好郎・静馬・水

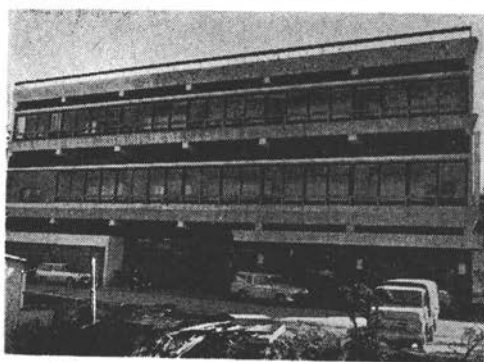
客・古方・柳宏子・

形水・白柳・生々庵

・一三夫諸氏。

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186 (代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

川柳塔社新春句会

日時 一月七日(日) 午後一時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

兼題

席題
会費

柳 話
*短冊交換会(一人三点以内)
*42年度句会賞発表と表彰
*雪月花句戦
*42年度全出席者表彰
「スタート」
「猿」
「新市街」
「名門」
三題(三才、五客に呈賞) 各題三句
百五十円
懇親宴(同会場で) 会費七百円

山 後 市 北
川 藤 場 川
阿 梅 没 川
茶 志 食 春
選 選 選 選
庵 番 番 番

★投句だけの方は切手50円封入

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪 070 3985 番

2月の兼題 「住所録」「物云い」
「見せかけ」「スイッチ」

・ 2 D K ・

★あけましておめでとう
★おめでとうございます
★新年号の行事の一つと
なってきたスペース
マヒで多くの原稿が次号
に回わった。まったく申
しわけない。
★サルの人真似ーだが、
たいていのことは先人が
すでに手をつけている。
★サルに木登りー教えて
もムダだと云わず、いろ
いろご教示ねがいたい。
★サルしぼりー手足をグ
ルグルは仕事はたのしく
まいだが仕事はたのしく

やらせてもらっている。
★サルの掻き登りー大阪
の相場師の間では、むか
しからサルの日は相場が
上がるといわれている。
ことしこそは「川柳塔」
の相場を上げてみたい。
★サルが釣れないが、
でサカナは釣れないが、
なんとか努力してご期待
に添いたい。
☆新年号編集の中に西尾榮
氏はほか、多くの人がハッ
パをかけた陣中見舞いに
来てくださった。やっぱ
りうれしいものである。
(不二田一三夫)

募 集

三月号発表(1月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選
近作柳樽(10句) 川村好郎選
課題吟(各題5句以内)

「先着」 小島無聖選
「真相」 石倉旅風選
「チラシ」 太田良子選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

四月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選
近作柳樽(10句) 若本多久志選
課題吟(各題5句以内)

「筆」 久米奈良子選
「花見」 河原みのる選
「コーラス」 浜畑胡蝶選

★川柳塔の投句は本社同人に限りま

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百二十円(送料六円)

半年分 七百五十円(送料共)

一年分 千四百四十円(送料負担)

昭和四十二年十二月二十五日印刷
昭和四十三年一月一日発行
昭和四十二年三月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

疲れ
肌あれ
二日酔い



肝臓を守る

チオクタン[®]S

〈包装〉 45錠・100錠・300錠

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬策** 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

近鉄特急で 日本の氏神さん初詣と伊勢志摩国立公園初旅

お伊勢さん初詣

神宮(外宮)参拝は伊勢市駅から歩いて10分 外宮～内宮バス20分
神宮参拝と伊勢志摩スカイライン観光バスは伊勢市・宇治山田駅前から

初詣特急[※]越年号・迎春号、増発 31日全線終夜運転

大阪上本町から……特急1時間53分 片道 750円
京都から……特急2時間23分 片道 870円
名古屋から……特急1時間31分 片道 620円
(いずれも座席指定特急券とも・こども半額)



■近畿東海を便利に結ぶ近鉄特急で伊勢神宮初詣と伊勢志摩国立公園回遊など ご相談は…近畿日本ツーリスト・日本交通公社・日本旅行会の営業所へ

近鉄



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影